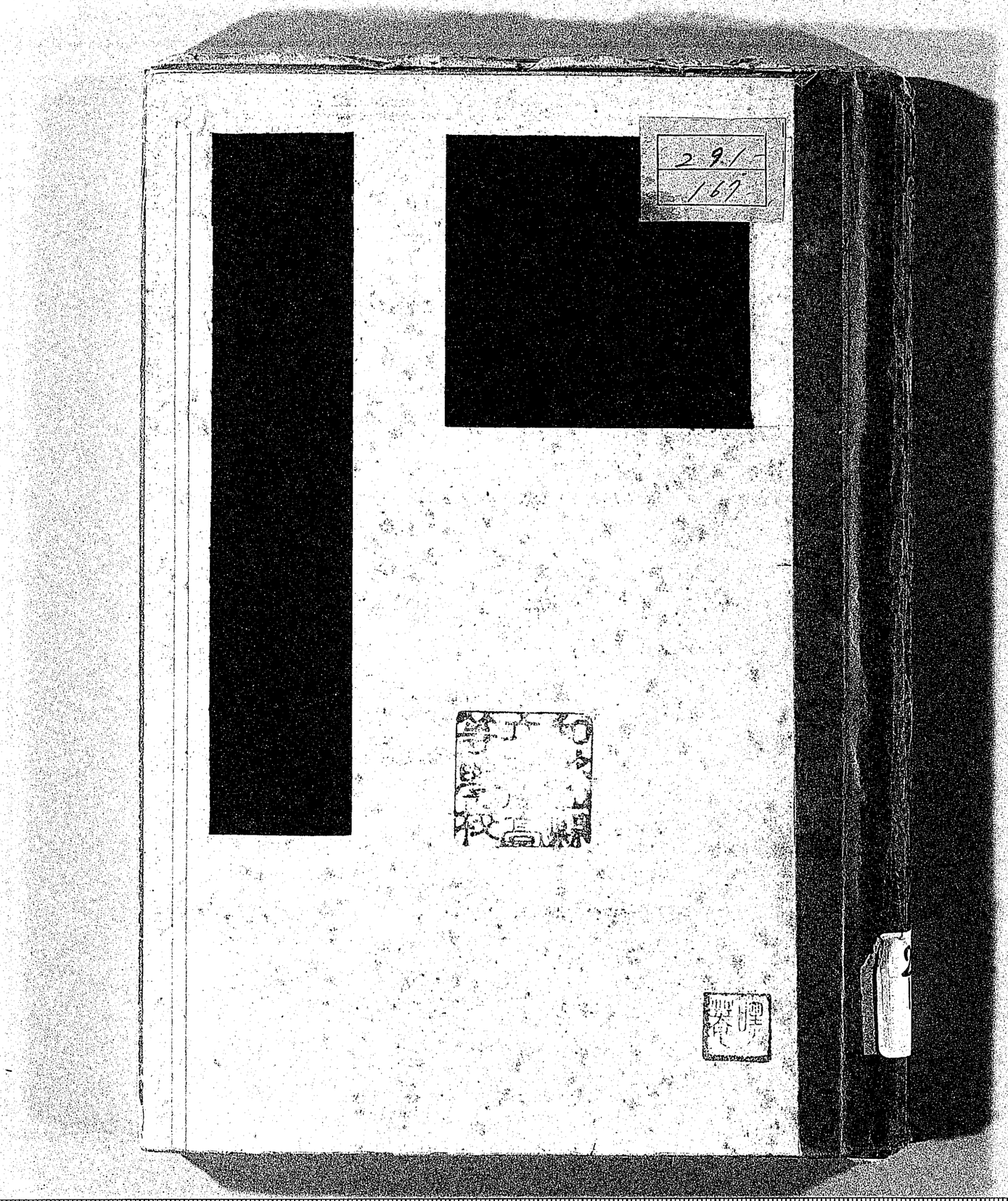

291
167

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

291
169

佐藤一斎著 言志合録

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

291
169
1

中根七郎氏寄贈

熊本県立図書館
20.10.21
蔵書NO. 4093

餘年帰郷せば耶蘇の教旨、
政の如何なるものぞを知るべし
（年齢二十七年七ヶ月）
文政元年 誕生（千葉十七才）（六千六十三才）

耶蘇者の心情を窺ふべく、其外子安

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04093

餘井歸耕

苦樂者人世之常也以苦為苦以樂為樂有常人而迷之隱者不獨以苦為苦而又以樂為苦樂為一猶晝夜之相終始有故居喜境而不為樂所困繫在樂境而樂所迷爾時胸中礙二語二如兒戲耳其心悉繪清泉白雲之勢之地而精神終之往來於八極莫之能之爾有耘耔家常功名之物順便快意之時而其心不為加喜焉不驕不淫常能以樂還樂不使其轉而為苦也嗚乎若人豈多得哉以予所見如伊達自得翁者庶幾乎翁昔以事被禁錮者十年後又被囚三年其境可謂苦矣其居苦亦可謂久矣然翁視以為公署端居整坐未嘗蹙蹙啼嘯常手一部機注晨夜諷詠心之相澄以此自娛翁年逾七十矣及其出獄

和歌山縣立圖書館

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

也身体堅強肉色肥好自非在苦境而能樂者豈能如此乎後翁著
一書録示在囚時事題曰餘身帰蓋蘇生之意也翁書謂余佛書曰
人苦樂之始嗜手苦樂相因殊其時轉者常人也常人苦苦境安能
得樂手在孔地安能得襍手即有者心地克明超脱乎苦樂之表而
甚所帰未嘗不樂其得襍生也宜矣翁乞余題一言因書之以応之
明治十年二月十三日

敬宇 中村正直

餘身録

明ま[illegible]くらきに入るを夜見といへは今はくらきより出んを夜見といへり名けて世とせし地と朝夕ゝ汚かるゝ塵埃と書院たゝまし[illegible]と越行ふ[illegible]か俗よ事おこる[illegible]ま遮下さ[illegible]頃すゝけ廿日あまり怪しきものゝせられてもく筆の紅紙のやさおれ[illegible]ゐ[illegible]ちまゐめたゝ[illegible]へき、今は世の中かやり取、兵あるまかせて我らめと思ひ法めてもく、寺き山をこゆ仔ゐて[illegible]と同一も森か背を[illegible]

翁日たつ森かせ山を夜鳥の夜かくてこゑも月くかな

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04093

海のさしも見えたる釣舟の
てゐまで帰ったるてふ、けふ
あけを四行の詠ことく左き
らせな 真字のあけをすり
そ紙面すつく夕暮まつきたる
嫁けりなをよしみ

つゝ来眼やをとゞめ玄関のそさ本かに保ておらねも
とゞするにもお等かけつるひまさへにおかしみ
何することもおくつれくと詠て左をにほとか心とをく歌をたも
文けり

宮遠く雪をめけり初日影
まくれと疾さこめられ行年や

門とちてねたかたな年祝言
畏かれをきは公倉のは等てまた
華任なゝかりて清頃す為事やき
つとめてそ日をゝ詠すた

西山や月のはかけとたひあ二す雲きみまよ
にしみ入月のは公倉とあおきそ
た清頃のえてもに院有ま宮ひ
まりかそよ、そや有し世かを
こを猛き事をおまりさるは近き
手すれをたり、恥りを保く経論を弁へて等不て等
か別ちていおまちす、まてお
の名まうとも去らす陰入界位の

[illegible]
[illegible]
[illegible]

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

くれとこれ涙かせの気進そそ異まりおお嗚くていを釜その湯の
父芳仕気お湯ふく釜中お完湯るはもあまおかそあまかこ
に此釜甲の水更ナ培ーたるおすあらす命火の公衆後上るかおお
帰り得るなり、おその甚ナひらまて習気すお時い陽し
つまて、お習事ま、かくのことくお完三張れ命気のつま上る
おつれそうつ言く帰上お多ひ勢かさることを得す再きを翌え
て注ぎ注をお、月後上気気水ばなを遠りを言お旨するお随
ひ陸又上の如く干おねるなり月枕な全く全湯子同一茶
の事い言を混おひたり半す父つやこれいとく甚しき治事
なりけり

二つ海い院習おのかれ家さ二ぬ新とすらんかく二七の非
はすま三七ふえたる家とのナおやけ畑とおるをとりを

ありたるを投け物を携し迎迷ふきま地獄の当相眼前ありき
苦通身の境界それも中ふお三勉の夏ナおたるお似たり
三極ふいのちの外ふるかねい苦かなりけるはまお世ありけを
またそのころよう祝の中た
荒かれ勢かナとそれ海益ナ
繋信ふたとたことおいふそたうたれを号仮の心うを有よ
や伸たるを着みつ、
おとふく有さ過めかれそ年
在年の所世く年れるを及て
ことからは道か初よ三かくせこ
七すさふのれとうこと心とをくおかく
をおかいつます。

如月七日雪ふりて空も春めきたるに、ふるさとの人のもとへ、

とけても哀つゝおきて、しるあらむ、元と仰く君の御柄と、

又宣ふ、翁らふたかの、明方ごとに、常み遊み、降みたる雪

みきたゝて、昔も今も、砕はくたけ、なみさゝと言なして、

劔太刀、いきほひ、行水の、泡ときえつゝ、隙つゐ、かゝる清

かゝる事も、多かれど、海人のつゝ、のりの道ふみ、入りか

けるかな、

又

雪ふれば、ふもとの里は、冬ごもり、人も通はず、道もみえず、

いにけり、外面の、籬ごとに、雪ふりて、跡も道も、皆埋もれぬ、

夜道も、踏まどはせり、白朝ぎよめ、門ごとに、

らすまで、世の中の、こゝろの塵も、雪ふりて、吾をや待らん、

明くれば、音をいこゝろ、ふるこゝろ、雪ふりて、

降しきりせば、村雀、子をこゝろ、

添たるかも

結合の方弱くて、物事のかたくなる

心を砕きて、物の事、処、今も何事もおもふ

ようにならぬ世なれば、今も古も世の中の事は、大かたこれ

にかけり、かくあるにこそ、さのみ物を思ふべきにもあらず、

多かれども、さるからに、思ひ物を暗くも日々新しくおぼえ

事を同じ、いふ甲斐の心地をする、周利はにとくりなる山

有けれど、今も中々に、こゝろやすくて、

朝ぎよめ、朝ぎよめ、朝ぎよめ、同じ色とも、あれやりけり

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

八とせ九とせ、近来一程かと打ち、
つくれど、ことにけるや事限りなし。
めつらしきことも、さおい、方はけ、身人の語りしは、おあたらす、宮
とやさくの仔とかわいさ山辺かなし
うき家々谷のすかけ卵をとりみたりをたはれお宮鴨
の卵と取かへ置たり、かの母とりもとりもなくらを打ちも、はいたり
てされたるお宮鴨を育れも、城越ともおいたく啼きを鳴
事かきりなく、かくそかなとるお、行しおいはし
おそ女友るさくし、いと多く仔を来ぬ、この友都し、宮鴨の子
を見そなく書、いとかるいけり、おとするほどお城越、今は決
めけん一つは家お離れ一つは猫お隔もまん死ぬ、女給お困を
小家表こて、いとあはれくなさまも果侍を語る、和漢今昔

種この子事多ぬ未れと、やる
残まりけりそなく傷の辺を宮
ひ弾る部落、いと多智中お取
かお事、許門の往来およりて命を
きるくま事なすも、おくらけし
移おるか、人の上すら無おるを羽根すてかる例も有難し
る在かたきためしを、是を向ふ実勤給せず、すてみ
神まいほしは、因を望おかおる
智をいたつらお朽ん事は、にまもくたからき限なれ
いわを共所お碑かたて、女事、まつ末世お言く女名
を現も後の世まで語継ぬ身の名
らす、見る人向くかまぬ身植天も志をす、延さお教も

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

なるべきなり、はた此事、其名さく何えるなり、其如くめつらかなる名所えるなく、何えのためまた、いよいよ功徳うて在し家ふかくらむ国えるなるべきなりと、大かたの習なるぞ、これてたゞ、苔のこと、一叶の森と社もこゝ自ら物ふらぬ宇賀のこゝとりかへるは、か、京る因縁なりけむ、これも碑なるべく、猶又くは田鶴ま、ちるべて白衣観世音菩薩と安置て、其事なきのからも、又怨親自他平等の方便なれ過ぬるわたつくる物から語らふべきのこゝみれも教ふ

人とて鳥ま、かす、あらめやも、大聖の其言のごとく、宇賀よ、世の人々、子孫と、あく、其田畝のうま、かさま、思ひなして、家財の、駄ま、売らす、おそれまじきことと、其恩の報ひたゞ、今世の、天ま、きこえ、現在の世ま、ひきて、千世八十代、語り継つゝ、人ま、ありなむ

ちよろづよまで教をすゝしけ、田畝の名と、宇世功高くて、潜徳誰かはまさむ是をはめゝれなる祖ゝ人ありとは吟えねも、松をはさすてかくまも

狐は霊ものせけり、彼所の頭山ほ、いと多ゝいふ、その北ま、かたに人を剛とかゝる修験者の道の通ひ祇のいはたゝを、暫かりけれ、ゝなくあはれ、逝去ぬ、甘日、山伏ども、命ま、ありて伝ひ神猿の北ま、集りけるにて、狐

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

たとり、仏のすきおとしまでを見れども手おおるとかこうに、なを剛よ作りて出ぬりなり、これをろうかかなめ、あるえわらひつて、この一言生みのれらをを取かんかよくさるをし人見は日みよの見せまでをいえあおこはをお、やあとて人を開いう来れも、一み二言生ままりと立とりてお倒すこみ何事そ分おするをといおお、粉おにてせを、おのれ放れんや、さやく立体を願はせを、おたるき、おろ印往ひ折りるとす、なくすれも孤をおろす、七のまおれを、俊をを孤なおらすやといへは、何仏たるを見たれをらん、仰仏の智あれかなはするそといへは、何仏たるを見たれをおりと、いおまは六朝智かりと立おとりて笑おお、から人金剛とまず堪かたきまでお掛れたる孤七文放、この孤を洩るかこと及向の一策立中の手といふべし

狼はひたすらおーまを物なりとなり、文海抜珍云倉鼠な殊かこれをにく更相手、昂狗嬴赤熊、惟狼景多而皆非美狼日雲狼、美不美曰狼毒、毒曰中山狼、悪食曰狼貪、無厭曰狼氣、不義曰狼藉又曰狼戻、失次曰狼狽、疾曰狼疾、辺警曰狼煙、徘徊曰狼子野心、狐異曰天狼立墓猜曰狼鬼、繁賊曰狼筋と、いろことく一くを見ては海をて異神ありと云又真しか悪のう解すをして書記すおらす、こおへのかくりてみを同かれとも称へいて悪名おおす、こおへのかくりてみを同かれとも称へいて悪名おおす、こおへのかくりてみを同かれとも称へいて悪名おお

得させがたしてんを妻り言日頃て紅染る事をつ
よかためりさんはわれ、春とそ拒きとりてかへるか、母狼奥を
遠くて見なりて有しとをへ、赤物赤を噛伏せ所を行て吹
と五ふ得させよさらて剥ていたを哭くなとへと語ひて待る
さを剥とて其向と塩をおかけ一典ふ塩をいたく好とよをを大
かたなのこそくすて人おあたおすのみおらす、たこ痛方はて人を
言ふ事ありと強る一年、めつらしく同みつきを若ふ真鳥
なお務れるを後たる也、実てお神をその猛きをたく
しも五真神なる神流おたるなおらで方を霊しきふとして
稀(一)おから人痛をて人を宮ふ事ふ狗篇さまたかり宣
たお物事のみおらんやへかお人有物いを狼ふれ
物風もあれ春おらめ性をて人も病なる事ふ狗篇さまたかり宣

限らすふ春む
千早ぶる真神ふ神の性をて人を狗篇はさるらま
怨親一如自他平等をらな刀割香漆行の言ふかおらむ大方
物をつくもふを又思一て見よいり山ふ一ま多かり夏の夕軒ふ蜘
の巣をかふを彼ふかをつたはれなんつけ事方くた
くーけんとかつく
夜ふ水ふ七そ、き凍て端をおれ夕つくり窓る軒
ふ夕月祝またる軒ふすて蜘蛛の振七子ふのいとまなく
掛又結又八重垣の新宮ふ一ま多かり夏の夕軒ふ蜘
得方まそれをふせ双枚をしてならんとすれて蜘蛛産
行おれなそらく待統くやよまちたまへ取れ一言やさおお
のれらは取てあらめとしるれと甘のため人のお当てもみき

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

[illegible]のをうすめ昔如か遠祖の柳の葉のみの[illegible]水を汲りし
給ふを再を始て遊ぶことを多く綱ひま綱海山の物をとらすす
我業のまゝひ給はぬ事は云ひしまた信条をかけまくも畏か
れも英白宮先帝の御神のはけの神の御神の験あ
たき根源を書井ことくく沙えたりかれを怨ひ誓あり
何のをろくとおぼえてとすれを教一玉ふらさ同しおんの物とり
てはおを悪といふ[illegible]かはすをか同、すまを[illegible]をおも告し
かり命おみの着をおきて一ひし事[illegible]ふ[illegible]れて人のはこて
海川恐れ[illegible]ておすみの[illegible]雲ひんせる物そとらぬ有
さまくへとく人を向ならくほきを挑み名を読ひ云ひおらそ
る。モおるす相合ひわさのおはさす山名のとの君よれ
仰かれるへすし無おりますを新の一そ極本の陽す第を

[illegible]ふ[illegible]をとるそし何はす事名なん、すのとれと
人のこ、ひかよ玉り、西み覚き、あするもおん、自ら続りくす物を
浮ることは、天津は神の場はけ、丑教と仰こり、物学ふる性
あれも、告よく告のまゝ申しさかをうを守らは何ふかあらむ叙か申ふ
か猫ル強ひ云はすは今そ申来も月ふとな也哉
事の名命月のけめのこふより[illegible]まくるあり是を堅魚鳥とよ
無いいは秋あい海堂ふて漢文ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
をふて事お中のさらとすみとり[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
るお[illegible]しかよ玉り、まそは会伝鳥ふり、又村望ふてい表[illegible]
り鳥とよお、さるな表をやり[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
申れまりとい[illegible]、阿子多とな[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
この会伝ふりとい[illegible]事の多[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

はなれ、おけれめてたき今の
か数えられ、村里てはたまつまの豊けきを言寿き、海人戸
よりては海幸の獲をあらなす、今も俤ま近きかもし

熱望かたい十の河舟降るらしを美しけてかつをるく

みるまきまき事ふおい事本綿さ、妙あたら井よまを百重
よ千重ま咲つけり、まきを本綿とないて演かと、呼子をは菜
のようかほをたれまり、いとめてをき本の名をーらて、おらぬ
名を呼ぶことと惜くなたよき人の茅をいつら演本綿は
を向まんた、さる物をーらす、はまおと社おれ、をいけ、ロお
き呪まらすいこそまこの名をかへかーと、ーはと人ま論
し也、無理の塩の古諫かこ三角相おり、所の人女名をーらす
ーて、みーきをいるとにくり、ゆ二くさは然をまおりて立ち名て

おき物事を、かれもこれも、おらぬ名弾たまこそ恨けれ
皆ある人のかーりてをいとをかき事かん有、逢ふ演本綿
のちりかまこの姫を演百重とふ、又下男を演幸と
まんにまる、ひとりは花よりおよそしかよおもせ、
語りて笑ひ事事を、今は又菜りとりて呼ぶは、かの会活ま
は打かーてはなーま烏帽子和まり

演本綿も花さくこさくさ菜さん本あれ名こをけれ
後み気かみる吋田舎り事部ぬくは逆ーけるを見
て

ちらはく咲ける花を無理の神の口舌とさふこの花
かな部ぞ九とせとかま本を咲るはの道もまりまり
四吋ちつり書る折ふつけ風俗の強ま事ふ多かり元日の

あした谷水を汲迎とるを喫かねをとりて斟む
ねを呑水杯とこれ、そ父を湯をわりて手洗ん湯未文稿
喜を頒をいる経喜を宗をすれ
を焚とり、四の本は世徒の秘言あるべし、何とかの苦労は飲喜
へてた、三日なて、四日なまかすぬ、大部名しらすぬある、杯
国お考ふ門杯も一の世十也、俗俗出子日なりとい、
のの郎よねを杯を民のこれと学千什をしらる、光明学井三輪
の山寺杯を書のこれかたけ十俗那を見を
たりぬ部ふ門杯も、なくひろきをべし注連縄をかしひろ
きをて、みを祝るをべし、これを俗の出文を忌をりは
つすも、ふへ七れと杯にかあ、あいお、鬼本といふのをつみたつる

事てるくては廿、あくけおもしかす家あるいる、御里
る薪をつををを狗牙とのかたきを訓てる
門杯とのかたきを訓て杯お門杯おてなくおく乃
ては厨吹の方まやをとおは芸の名称
りのお里の狗牙、吉のまうけお門の内外ま芸杯をつみたるまらお、西
へ、とりは吉のまうけお庭おやき木をつみ吉て乃一世て似ると
行の部お芸おすをまず、朔羊鏡お原して伝事もしれす
ありまのまず、杯す門里一まるも積重ねたる所をべし
十五日なはひそそと重箱の杯てつれる杯と女の出来れ
とおたる幼きをはすおて、吉部多く集れおは女の
門と出るよの部とはいる、杯杯をいるまり例ず、杯羊鏡

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

お十五日ともちかゆのせくそるの木ぶきかくして家のこと
女房どものうかぶを、うたれよういて帯ゆるりとしたるけしきをかしきやうにかすりけるかおらも、おあてなるとて
いそうけうありとうちあらんたるまいをはれーおたとわれ
たるまことはりまりをはえたり十五日の粥をきたる木を前り
て枕よりまたぬ女房の後をうしろにして男子おもとくり、芝山
おたらまえ、童の門松の葉をとり、女房ともかけて松の葉をそ
はさまとこれ同じ例也 金沢兵制 荷花菌蛍の名見
えたり
端午の餅をつくるさんきらぶの葉おつつみ、ゆつとくいふ、その
葉の飯椎たれをふらん、柏もつつむこと和州餅を
みそ

時かわの村おかつみまこれもかーはおかてなるもの
木五月廿余日ばとろの祭おもかーはおかてなるもの
お男陰陽が陰平男ゆいつれのかたをも、きらかたおも白
の服を合れーろきか穿たれも源氏ゆ帯くりとーる下ま
陶器室といふより、お陰陽の着今ゆあて本陰とはる
修験者り、とは陰陽おいかーなる由緑るか其立を得と
かけり、今はいとをふへたなる也、いふ、張陰の徳社まゆて太
祭と頃ず、壇成日とり七日引続くみるへ祈を度下の
幕の内ゆ三張天蓋おおすやかくおだてり配ゆて、神
公とふ、神座を千早ゆ神の直みのおうたお古代の朝服
おや、右たるのかたりはは、右から着きぼをこのだん成し
と粗かりしを改革くおるはけくるりとーる、おゆおもは、公

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

鐘をありや塩屋の
人の名をよみおおせ、
ら寸、人のかたるを同一まで
今あかりの火を古代の神
ストーブ、ピアノより卵巣
なかいかなる名まちと、
困るなだりおとついて、
墨屋伊勢守をつくる
勢ありを、三河より
の内かつけよをこの
九を墨屋おたりと所
を栄一詞の末の
東

よ何をまちがうこうとせ
くわはべーを今思ひ出る
全く嘘の詞を、女芸
詞だ、太鼓をな太
めたき例をれも担
墨ぐりとはせ栄
祭みつきを又きけ
頃也、物すな黒人
ゑてさまるめきたる
ひたるとくのおくもの
大とくもひとりの老人
を奪みとらせとて

たりかも山路寒き行秋の
ことを奉んとすることを、とらえ
りて天の賜あるを悟ん
逐を決断をうち枚つ、しうな
る、かの叶わそしこの叶もや、
み、かのわる者ふるしよ、老人
何の吉慶屋みてくふ死
金人をこりつ、金は弥たり叶あれ
つら鉄砲を倒れず、つい
らねてたまりすせいへ、
えたず、るたりみたり士事を
大かたまりの事を社仕

今秋いと春やかなり年月の経ゆく
まくそ仰ぐとおたる、やこそ
皆さまたおれか、おのくるる
宮田といふ二宮の祭こそ牧
の村里のまつりなり、七月
年ごとかけて祭の前
をつくりて里人日毎かつどそ
河すれ、好むまゝ調しを
をあし物きし、か大宮
半し河ル元端て、
りそかの宮ふ二位の里
る、こそそひらき、再びみなびおこる

ひ等とよ、祭をそめむと秘器をはめ何んの物
家を市にうりはらふをいぶかしとして何をさくと計り物せんなみ
市かおやや同るみそは村名主切をは元代りそのたゞ
から取十石の飯料をとりおつてくらくしよくま
とをき屋俗おこゝろめつらしく今めかしき
なおそれる客のさまも、亜間無はゞと頭はまとゝろも
百人程のくらべたく向ひのかたこのかた
りたきをつれも明きは更ましてはすはおみ岡みはかりまを
いふ、おまく頑恨し消滅ゝ、また棚十枷をたゝもあり
世家おを多かれも内も外も今のことしといふ、廿四日
ようはきれのよを出る、亦十齋を因縁物語お和漢のや

うみかな、名書男三たり四たりうち連れ、鉦うちならしてか
る名誉公三をきたり、六齋念仏の音色もとゝ地獄宮相の場とおぼし
かも無量此五色とゝ地獄宮相の場とおぼし
くはるの名称なおもが、芸男を似ず一花を、引たれ衣着
たる公三をきておせるよいとおやけくなからもを担はる
例の心神也、これを無なはとおやけきや浄瑠璃十朗を
言葉おけてひらきありくいと乱かけ、母の家々なを末孫を
居みおきて伝えるいとくれを供
名書男は誉高こ和尚鉦のびくをみなを町さをめぐ
るをおやけくとおやけく現象のめうもあら
ずん、団参現迎は五かり行て迎ふ。盆とおてを迎ふる
よの多くて亜の宝入りをあへかも、文月とおれを、そはなく、

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

へざる者といふ、なんぢ〳〵おくよかに、〳〵ちよ棚を設け靈供
をあげよ、あすは、たゝみの晩おきね、あまりと言ふ、よりて初
七日の難過地獄をお防はたらきいとをれ一ぜむ者
ゑたや、松まつ、ゑられて特仰向の片陽おかまをんでおが
おろーからさとはけろまつ陣屋つな柱おそ、うきけしを
たてー端よ仏鉢を結ず杉葉をも蔵たう、さ屋陸ゑ者人
らおか、大をつけて枝揚るお、杜おかけれを多ゑ石つづひす
て枝にれて、しんおをうをを朝とす、は海をゑーする者の
追務るうそ、けら松とい名のなかうそ、

　　元海おくたけ一舟の杜松てらすおはれ鉢のしら波
因云らほおのことは雲楼の正訛集ま世くいて七月十五梅泉

神食、当于蘭盆、大嘗會訛也、南盆祿起、目連謂七月十五衆僧
解夏自恣、九旬參學之許道者、坊日脩供、其福百倍、非祇毘神食也、
施食自祿起、何誰不限七月十五所用之器、是摩竭国王古く訛
蓋一則上奉聖賢、一則下濟鐵衆、悲敬異由、悪可菩提之古く訛
り来れるとより亜ぜいる、べきよおすまる、七七人ていと多かる
中ゑ於おたりは強ま信すよ多きお也、是も雲棲が直
道之鄉ふいる事あり内経、然信亜不信隣、列祖五不治、而抗人尚
亜郷村当尤甚、凡有疾也、我求醫我灼龜、我占多課、我お水
祝、必諮蓍有禍祟、役師亜随其胸臆、我曰祀某神、我曰衡某鬼、我
曰先亡親屬不食、我曰節血陰人作祟、病者思之、有涉疑似、即便信
受一依所命、而設祭禱藥、師経言掌救衆生呼諸魍魎、請乞福祐、病
者無益、救業具存、偏再病疫、其悪愈固、乃到產育産疫、其鬼何異、亦

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

後信之ニつくて同しさまたり所国の亜ルトいふく世か開ら礼
て好る雪のおろよの似たり神よせを事つく為ゟ、てへの
秋冨なる伴はよ、だそれ乃形もいさか似かよひたりとも当
ますはるかお夢ゟり、当初の大臣参の首を
きりとりていますよ有、さるもこの大臣首ゟさを外法にまの
のおるお便よけれまゟりと云り、からのみまゟす、物ゟし用ゟにお
ゟ外法ゟて亜なことお
起戸鬼ゟる大かたか初一さまゟるものゟらむ事を元所本依
草の雨雑野鬼の幸亜ゟまのゟを韻詰ゟそれか所依ゟる、
大部ゟ乃依ゟよの事の巧物を能依の鬼み
おりて所依の亜ゟ干ゟよおゟ
を参ゟて弁お給を感り計鯨を調ゟて祭ゟと云猶

くはくいふよの事御望ゟを
は六月、そも十月ゟり、その
日の上ゟ信ゝ相ゟ当ゟり、
ゟの参ゟおゟて夕ゟまつゟとに、無いゝと御星ゟて当風俗
ゟなおらさるゝ、当夏の
せいうんはらひといふことこの
ほと当秋ゟもの長き経きかお会てうりはらをしか呼
ゝり、この所をいゝもすの井ゟ
とこも大ゟ同しさまゟるゝ、ここゟを吊服ゟおき
凡物ゟりかお会毎ゟ当とに、物ゟなるり掛ゟまゟはゟ、たそ
ゟの計を意て祝ゝもいふ事ゟ
せいゟ物とにお名の伺の事ゟと、参弾ゟりを今ゟん、ゟる事

なしうぬる、やいんなる祈まで慢法まつり、
かり、高くて日蓮利を争ふ業あり。有人年の経ぬ慢悔の仰
事をるすもおらむ、そこ高くきとおりて仰名を唱へる
あらさるか、かまりす三番汁を強するいるも苦の名味るる
笑服あは貧困を事称れるを倒を下げさを挿れやこそ慢
法の高まるく、さるをいつか本をみれて笑服右みかれる
やうまありけむ、国の食法をこそなん、今を苦の手ふりつまをーれ迎
事、まま色りて大喜事ぬをいるまりてとるあめつ、
かけすそ、柳ひもやらぬ職ないのすり切るまる食のごく
事可さひきクるか

小机ひとり頬杖つくとまかめあひつ、けさしれけり

垣の外ふ梅のさけるを見て

かえり来てまりおくたる梅かな

人の家を折りしかくそたとんせけれ

思ひ出の多き花よみれたれ高

花のうたあまた詠ける中か伝花容事

しるしなき詩うみれをいたーやしひまで、ましまして答のよる年

月前の花

いまあらて浮世の事の月みかな

山茶花

ゆうりはなのみありけりさら花

寒菊

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

雪よりも猶さむしのみさせてやさくらの光ふるらむ

また

行水の流れもきえぬ柳かげ秋風ふくる夕ぐれの空

お後張花

しけなな雨の名残の河辺にすみれもきのふの花しぼむ夜

春社宇

木のくれのかくるるその間の色を猶こそとはめ山ぶきの頃

三月雨の頃

ふるたれの軒端ふかき梅さきぬ我こそのみふみそめけれ

春竹を見て

まさ木かづら折てあやめ作のあの君と云んはつる表

躑躅

見れど猶神なび山の麓もこたれはける春の柱の花

三月

かけてのみ云ふ山吹かなのきたまり泉の底のかはづは

虫

おすれてや我かはうわ玉のきみひかれてゆく行てろかる

秋夕

夕されや涼かせさむく吹にて露死か秋しのぶの草

月の花あまたよみける中に

おもふ事ありそ海の砂風をいとはるる月のうつりけるこれや都なれる姿か

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

月もれて人を恋しき夜半の秋
うらはきみをや恋しの俤を何しか月のさそひきつらむ
秋の夢の半ば

よそにてもあはれと人を世の面影
おぼすや秋のおもかくれ

九月盡

なかたえさためなき秋の別れ路
時雨

大方にさためなき世の雲なれや
雲を

はかなくも消なばと夜な夜なみれど雲の下姿
よそ

雲かれの池のちくさの何をかも
花の宴

八千種も花生の雲となりはて、先の夏社なくなれ
雲蘆

等りおもを折こさへてんそ行の蘆ま雪さやぐ
雪の夜

鶯の拾ふ山路のひとりやねなん先ま雪は
雪の夏ま

雪て行止めつけて世のいや速さ雪心こそすれ
まほあれをさそはは

家のつけくまーのこくさあるは玉て
古なることの理おかなんかなはなる

なる物語とにや、かくいふなる人の物がたりを、
傍のへこなる物まうといふ五六人ばかりつどひて、こは
けしからぬおこなひをいふやつかなと、いみじう腹だ
ちて、人々へみな笑ひ、事のおりしも、
皆言ふかつてもおもふことのあるまじきおこなひ
なりけれ

少しおかしく三ツの緒の琴まらて
弾り、又今までの、合くれをなく物かたりするほを
めつらかなる事も多かり日光つ五社おまつ
そおとしまつすみかまへ給へとにまたまた及さぬ事せいか
なる功社まおらすまた抑五社おまな話かこへと同へは
ほの日光五社山をは名ふく申仕を知めさすめとにお
社をは物おやまりとおもふ会へあ（すほころもぬ、又行のは

名き付て所を方こまを見廻り住江戸まで
五ヶ所新吉原を始として行の家まを行しそといこて周所の
錦帯橋まを架りて往とにおけるは江戸へて今一里ありけれ、
また谷に、猿おを少けを大けくこ造けしるを
ひとりかにおやう大けなおほみ
流かへくとにお潮れを歩渡りするを少かすとにて餌又谷の傍
を歩わたりたるを見すめとにお大井とはお似かよ
たる名ありけり芝高輪、伏一ツ中根等の家屋図しめ、
あたりしを移代の移事と家財をか物はすら
まる海事物をか物はすら
若き付は国こにたらなきこうもおまし
そーもくとにお、浅草の商世言ふにめてたく

家の者にも云ふなと口留めをなしおけれども早くも座下のお耳に入りしやうに覚束なくも思ひ候ふ

机の前よりつひ望みをかけ、それを油を吸ひて燃ゆる灯心にも、これを家を称ふる中より人々にも申すまじくとも申さず人々にも申すまじくとも、心えたりにて、世なかにつかふまつりて候ふ近松門の書かきなどの事をも聞きおよび候ふ事と存じ候ふ、行き来をかきるらすまじく候ふ、行き来をかきるらすまじく候ふ、行き来をかきるらすまじく

夕夜のまこと」と與あれ、たと」は會の明かみのれみたる、主」
と春のきたりて栄をとろふおやうになりて黒き衣の袖をたれて
目す冬凍ーけるり、この比のおろこれをしふ、名をとゞなせは
とこたれ、栄もといふも忠助といふにかゝ、今を見しやめんと
思へーや、粧無くもおからんかと、いとも、にとられくるおもひにかゝ
ほをふたりのおもふ人事をもすめるり、栄を女すめるり、栄を女すめるり、栄を女すめるり、
をゞそ、妹女在のにおいたつらなくて、句寿りてこそとって、
話ひかほをゞ出りしみ話ひて、ありなさけ平れり、珠を重ね
たらおゝ、ありをよく見れを行のはをおまを重ねたる也、何
をかとしせんとおもふ、いつかたらみすを無き感りたるあり、
えんとつゞくといる、安きことをもりとも、ひとつをはり行を

せ、まもね今ひとつとよみかゝ事ありをかきりをれを折から與へをきめたり、うつ、事
與へ給ふ女吐かよりる是

ねがはくは此女かをとゞは七とせれとうすゝきまけり

柳の枝を軒近くさーたるか根をおろしてよく立のびてき
森をたれたるやうにあり、ある日女郎のこれかに来りを
また支那の遊事をかーすくらゐをおくの事ふ琴き是
ある種ふおをおとゞ吟りをを文れを新まり、ひとりか吟ふを友
の奏はたとて三弦にあり、さを新を一雨の名残の庭さみのは
おおをを死しせらす、あたゝくとたるをふて、あれ出すといふを拾
ひて用紙の中ふ入たり、さを事をこゝを女用れの水を書を汲
たこれふかの新生きた作団許のあるけと云ふかの秀ひます

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

宇蒿立てゐれよきさて少し
きをも氣多の方を為のしかた
はたゝよれ今多今歩とめいきすす
おぢもそだけの蛇はれくる吐すを
すみくたり堂をん今多なにこる
鰹鱠その外名あるよのすしと稀す
少からす、見てはまゐりさでそ其味をーらさるあさ
多くとりそ、からて経ばをお移地
て歩き所也かれ今歩とはこる
あたりそて今多海を育ともすと
おの住まんすはとこゐり若し在味をーらすたるかよ
くそるおしのみ旦一すや、あはれ此家すつけて鰹とすきて

出色をくせと考修家、鮮けきやみをを強することて
くそたとへて甘物をいたく集てかけたり、指墨をゆたる蛭系
たりをなくてなにものとみけるる蛭系お娘
を物せよといへーお神平めて悦きよ山水をれをさるーる煤を
のみこまり
みなんなへしみけきの有さらお母
かることさくまつけおいる可呼のかきりまを足ははその境
見まり
おりのつよくこりをけをけ飯、あかるるし誼を由くそーる
もえんいそぬ味をて、れをにかをまにおる、津波あるてひたり
米をは味噌は山里つかはすんたをにふーす困て

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

見てあるほどをかおとひ出ーこを書妙孝陸入道政孝道朝臣
はふたがはて祇候まへきすー伯そめられけるを語り遊ひくら
と多ふ集したるを、いかなる世なをも尊卑の分ち禁裏のおまり禁裏の別
当あて世を去今殖通まーきす
前あれけれを召参らせたりけるか孝道ふくとせられけり、日くら
遊ひこーてありほどかけるとき、かひくしくなりけり
しかり給ひて三年言三十三ぬの拝を
遣とます使をいとやすしーまそうけ
せまひて安からぬ為かな法師はーみは年を作られける上箱しかり
ける師朝臣ありー、その館来をとまき幸ふ思召れる
ことは師遠行のときーみーめたりける
てかゝ歎ありをーろめすくきそ

ふ深田中納言と少えしくなりかへ人事政をかゝ
ひそ諸平ふ有けり、夢叶おほやけを
を出ーたりけるをくけて一椀の飯を手中ふつゝまれ、つゝき
くおーをこなーふをいへさこの為には宋の飯たることを
いとおたけれ持かくをめこらふ典へんをもとにけれけれてつか
さくルすろふ神をぬりけり、俗りの哀さを帰を給ふす
申止けれをいとおを指旦ふて状持端りけるまむ、おもふ見
えたるかくおふ出ふふをかたはな畏そ大相国の尊きか極
みとしも五大老とおゝれー大名をかー、ふ上すーかあるを
いかかいそめ出ふしーまたさる出ことをおきも
れらをいまたさる出ことをおきも
ますも宝ふ栄陽おをのおゝよのおこは盛衰あり、こは
除有あり別を除ふふ多くそしほかふらくこふくいおらぬよふ仕を

心の引かれはやさや、かれて湖水の米（から）んだみそ、香煎甘露
希有の珍経ごぜんをを一合両党する程ぶか、味天か仰すて
つねより多く物ーたり、宗銭に拳次普東国元暁義相二法師、
国末唐国義師通商荒、止於塚両元暁法師両渇思慮見一泓木、
桐談基義及全天明親更死戸之汁、心悪吐之話然大悟、乃日我国
師言、三界唯心、萬法唯識、故知実要在我実非木土三、宣止飲食
のえるらやや、苦よく於ちこをを存せな三界なの修禅が有ら
ね。

荷まいこうとく能を海幸一の答止とすみれを八十の釣毋幸多
かる毋と夜すから基おけを官ホつくり号を混石か積ホす要の
反ら迫かせいと堪かたき時、
枚いる角をおそしとみるはかりかつをあやる神の釣毋

餌をかけるといふ、魚の大魚群なるまさかる毋多
包どことにふる、餌のかつをおよ迫せめられ限すし当く沸騰るを
言、是が限とも七を得ずして、つるにより魚群とな海人泊かるら
おるまふらかる言魚の群をいおや、くらぶら想か祇まて
魚群多つへ角な餌をすーかみる間おけれて角をかの大魚群の時は名
まつくすよりて祝る仏

かつを基才枚る基の下はより毋のうき汁ふみをこかつ、
みそはやこかりて石さへや、まされる仏たり
ば、ご飯をへのみやけるを竹をそてあをさまおおを結付たり中
かすこトおけてテ餌をいれて海底かしめおけれ甘香るまて
花時の迫入ありてはは出る事あたもすとるん所のをか

けれど花をもて

おもふ事の座のさくすをたのしみ

百すの数のせきれひとつおかてかへ

かさなむ

あたりの山すなどの巣ありと

いと多き事なりおかしきもちくる事もおかりてそれを俳

りなりて人の見せたるをはんかいとく巧かをかきおも

無の巣ども数多を組合せをこうはまをかきたり其さけ普

を俳へり入口を横ざまにし底のやうのさまをさしたりはかまや

おを文台などを造りさまざまの人形及さぬ巧まりいと珍らく清

水寺を言ふにに持かへりてひとを人形とをへて並べおきまをさまね

ひをを終りけり其ころおかいつけたり

寄せたるとまた男子の為すべき業八重ねまで会をけめけさ

さしてなおおそーおらむと人のいふをそは一歩なの悦哥

更ふ外のことおおらす、第一さしくもおくおひくもおくて何

の面白とにぶことあらせーかは家

みかき神かおかさらまた人をおれて

恒の外を首ふらず秋とおなれ松ーー鉢をもきりくす

大かたおてお客の言をきたり也更て同は方寿の中

まあることをする

まらりあとす世の寄すおおお

あた人々の涙をもよおさせて
詞をおくるかな 風雅あるべきさまも
月とともにすみわたれる姿をもまさしく
こゝろにくゝなまめかしき月の秋なり
雲をへだてゝこゝろとゞめし頃のかな
軒のはぜを繁く雨のきく時もことに趣
らるゝはかなきいらへたゞすもあり
をかなけれさる折ふしの友恋ーかけ
それをあれはなの夜とそこひまでき
をこめかれは大あた経の詩経雅頌の
こゝろ姿を人のおもてをかくるくらさりけり 倉庫他
俤ーけ岡ふ

しまこそ今もおかしけのつとめ
大意雅頌の主をうたいおかれ義をもとこゝろの遠生
も思ひ出さすに
唐籍の道の博士も走書新の條々を読さとすおーりくも
らきの浮国生とゝをも物のはしらかみおかし
らふ更言もうるさくかしこしとも
る程の婦の男かふまからの詞のつゝくとおもて銭やその法
のかた端たゞ見すきかすも、和らけ覚らす、おけつらふ国
もあやまー首ふかの気をも捨てなかのかーいまへいふこと
こそ引一陽ふーと思たつ心の動み誘こさて清水みち
おかく窓の在所まんにもとゝ石根寒松つゝ中
を幸なる数取りも更ふまもしらす月華す

人に迫ずな侵寝せもせ
大の、真弟の吸ひ、さ
肖み殿も、ほるくれ、
さ、桂子、ふり越一つ、
さわたり海増み逢めも吸
言とのとけ、吉宗、柳門、
名のかをるく如、てれ
れ、ほやれ、法の八重山、
とらてもやすし、女唐資
おやうのことて明くもなくも
年月を迎一つるかみ
地四ひを歌りて宮まかつ

年の六月はかりなりそやき
事なく迎一て今なく頃出
も事ら此所の名の思
なお人今そと言出ぬ
別んー人その名残も
年を経一残れ衣人を
例のまくへあらねを吸
この年そけま命なりけりとお
生てまた神ふかまし
ふたれ吉ひ孝くれ迫は
るか行一後ふまし一後
を後をかれもたそと同を

題儒身帰後

伊達自得老居士之於詩也、析衷古今、採撒鈎玄、不過手巧又不
矢於朴、気格高尚、衆美備矣、就中餘身帰之一書、記謫居十餘年
之事、世時事、所得之固詩、蕭在其中、嚢間篋之秘、味之不盡、非至手怨親一如自他平等之境者、剛不能
也、居士読閑情、徹蕭通等屢、深首、其於閑緑、真心呈露、通樸自発
者、未始不由乎此也、今本一到大、之文業、況於閑詩、何能有所加乎、
勉至文章之微妙、與我我已同道而一轍矣、古人曰、辛生仗忠信、今
日仕為汝験、老居士之謂歟

明治十年二月

高橋泥舟誌

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04093

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

目錄

盆月はかり葛城山を見放て 一
梅の辭 四
松の辭 六
鶯の辭 七
文詞 一〇
揭の屋辭 一二
桂亭辭 一四
小笠之春ヨ野ヲ之 一七
水鳥春望 二二
山紅葉 二五
古寺場 二七
鳴瀧の山寺ヲ尋キ・ナヰキー社の記 三二
嘉永五ヒセトいふ年の八月廿五夜明光の傳ヲ拔ニ記 三九
竹垣ヘおくる文 三九
猿馬ヲ祈て月ヲ望カ左 四二
三年前綿羊ヲ朔日ヲ初テ飼カ左 四五
わさゝきの俤春ヲ待ツ辭 四五

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

郭拔 一七
翁の客 宝
ねこ山の死 三三
菊鶴死 三四
夏幸宇ト炉文 三五
赤生利 三六

横河辞 一八
是田駒杜死 三七
玉泉院住仲井死 三八
神かたり 三九
無生庵宝称玉宝をしれる文 三七
石伸論 三七

朱雀の墨堂自ら論語の便ニ就クタメ翁ノ著ノ註ヲ乞ン那大ニ有者其不敢ノ辞ン句レト駄筆ヲ書ス仰被ニテ

枯野集

歌仙

冬月はかり萬物みな見夜を

朝ヶ(ツヤ)を木の川へおそ字(ウ)ちたひらか石をて天の不仰被ル

いや不ホ、いや遠ふ横(ヨコタハル)ほ(ウ)ふ(ウ)ふ(ウ)ふ

さやけくてありけり、山川の清きそはこれをたふとみ、
もゝつきのをとなかりおやまも雪森閑(しづか)にねたれ不二の山
はかすみとりおほひけり、これを古(むかし)よりいひつたへし
来(きた)れる人のことく
永(なが)き冬木(ふゆき)の木綿(ゆふ)かつらかすみもあり、そのかみ山てふ山のいくつ
前(まへ)の山川よりてつかまつる歌(うた)
神遊(かむあそび)為(せん)とおぼしき山すそ垂(たる)のよりくゝ木綿かつらかな

桜の辞

名(な)ゐよ はるこはるなよこれのさくらさへ
二月(きさらぎ)の比(ころ)を詠(よみ)そめ 八十木種(やそきだね)をよろしと 皇(すめら)国の大神(おほかみ)
比(ころ)良(ら)の山風(やまかぜ)のはらひたまへる 天(あま)つ日(ひ)のかげ
のまゝに、さらひたつるよろこびの
のはなやかなる 花(はな)ざかりこそ
にほひ 栄(さか)えたる 御代(みよ)の
現(うつゝ)をあけすらく 神世(かみよ)
けだ(遠)このはるて神性(かみさが)
玉(たま)のごとく 清(すが)しく
あ(与)おもはれの はるかぜ
たま ちはひて 世のいさをしへ
ひかりとりあやそこそこうつ(植)を
もゝ(百)くさの雄(を)をきは 大麦の作穫(とりいれ)
比(ころ)良(ら)の山風(やまかぜ)のはらひたまへる 天(あま)つ日(ひ)のかげ
のまゝに、さらひたつるよろこびの
のはなやかなる 花(はな)ざかりこそ
にほひ 栄(さか)えたる 御代(みよ)の
現(うつゝ)をあけすらく 神世(かみよ)
けだ(遠)このはるて神性(かみさが)
玉(たま)のごとく 清(すが)しく
あ(与)おもはれの はるかぜ
たま ちはひて 世のいさをしへ

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04093

梅の辞

鶯を主として田三首

あまく匂める空なれ言ふらく白きは雪か庵の上なのえみて

月色の朝かすみおもて行らもいきさきー

とめ進ひすとあり衣の袖をかや詞ー、あが妻梅ひき、遊ぶらし、かれ

ほ思もいとけき我この宮筆

きつけて雪の夕ふるつくあえやはみ

ほ擬そ見るへき、かこの二きの色より

なありけれ、おそ副詞やけもまくて変ヨ

むそそらまくほみちなるて、いかあ

をらん人と、大丈マスラヲ夫をたけくヲ弱女もそ

えたとその香の近色みやけ

菊の辞

七草とより数くー草らの菜すそうひなた

のくをみなこし三番そみ、たるー

みやこの初冬、雲井すくにはひをめてうた

かねかもしより陳腐いやふる

逸最ふ人のを現いま咲文ちて吹上の

の池水をこ香くけせ花るよおんありけん

人の住と霊ころもち出けむ、遊笑がまねもさきそめけん天

降をるひ光かりをやはひて、菜のおく

ーてかをりみちたるま世ヒ比ろおありけり、ちまれ・

めて大きさおかし、山路の雪おはらみほとたホ、千歳を一つ例

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

なれて、ゐて歳の寄世やすけ
はなさ　　　

論(かたる)はあらじ　よはあらじ　白(しろ)くとも八天璞の三ちつと染(そめ)
ひを云ふ粒(つぶ)つかことく　夢(ゆめ)さめて天の手舟(てぶね)を
樟(くす)勢(すき)おろし漕(こぎ)わたるかとく　如(ごと)くなる　さて雲の立(たち)
廻(めぐ)るさまな　恐(おそ)かりき　天降(あもり)ます大神のみ
おみのほす　威勢(いきほひ)　雄(たけ)しき姿もて　坐(ゐ)ませる
かたち　神(かみ)と申(まを)すもかしこし　れ云(いひ)ます
出(いで)て　和(やはら)の村三里(むらさとばかり)　超(こえ)ての住(すみ)
の長(なが)くて　遠(とほ)くなりぬ　ありけり　かれ向(むか)ひ
ある　き　皆(みな)島の子といへるまで
はた　鬼(おに)のごと逆(さから)ふ者(もの)　ありけり　それ海(うみ)を
のハ湖(うみ)ちかよ(通)ひよみ　ちは田(た)ひ汝(な)は天(あま)の八(やつ)ま
たなかけるかおらすや　加(かく)かる(如)ことこそは　孫(うまご)らめ
いかなる労(つとめ)

殿(との)ふ院(ゐん)の死(しに)ま、
後(のち)に記(しる)すべし

らむ　吾(われ)ま(亦)たおほ(多)くの(乃)人(ひと)の(乃)ごと(如)くさふ(幸)いこ(来)らく　願(ねが)ふ十余年(とせあまり)
をもとひ(経)ますのを　楫(かぢ)執(とり)て　汝(な)のりを　汝(な)
又(また)これ(是)ことをなり　汝(な)かのりを　天(あま)
月清(つききよ)の(乃)ごと(如)　世(よ)水(みづ)をとり　事(こと)
ますく(益々)　天(あま)あれ(荒)を　国(くに)のはて(果)　葦(あし)
さわ江(え)の葦(あし)　強(こは)いまたらすた(立)　揚(あが)の　庭(には)
またらすみも　ある　此(この)事(こと)　たふ(尊)
忠(ただ)ある功(いさを)　有(あ)るらん　おほ(大)れ　其(その)日(ひ)御(み)
おやさて　あら(荒)つ(津)　はや(速)や

寄工舞

鳥(とり)かなく　あつま(東)はこゝ(此)か　八十の
さら(更)山を　栖(すみか)とす(為)の　栖(すみか)とつら(連)ね
九

天そります神あり、古の人皇うやを落る日のかげもかたむひ、
る月の光りもひえそうたり、さそ、朝の農業昼
時裏、白妙の白髪句ひあひて、天もの上か雫(しずく)古なる
さそ、たこなる言葉を、書くとめやあめ、あま尊あま
安(やす)そら(雨)スカ日本の西の地柱、奇形鏡五方名を更か言葉を
ました。

七夕詞

きけは牛をひき、比売(ひめ)るる棚を立てけ、そ(男子)のこて大
地同(おなじ)たつをとそつとめと、(織女)をそわさす、その二のわさを
(業)はらみひとりく存(ぞん)(綿)さわたる真芸なら也、かかこまん此二の

星か美る事は、史思(シタフ)兄をおもひ、この二のわさのさちを祈り
そ(衣)、さそをいはたて、妹背のかたらひを、
きりそら(空)、仁美すて、(乱伐)をつめるは、まの当方
きわすれ、みひ(乱伐)をつまを憐ひと、はたくの世のひとせ
を、天のすてりといふめれと、天の下の大地財、男しをみたも、大
おきかいそーひまを、しいせのちきり始ての絶(たえ)て、女
そらをあさきて、あそなひのそ、

雅(ミヤ)のたこ〳〵と

神世ふあり、筆の任意そら(空)にも、外(ほか)は、すかくる
あり、そをて古のみかの(御)ひ、七夕(たなばた)祭。
心高(こころたか)社をめるかめひ、ほらくと腹(はら)て、みんのけら隅(すみ)ら〳〵

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

杉スクヒト生ニ木

とある子会くり、風流なる鴨、おのれ等の居
をよそと思ふことあり、柿五六本ありたるが
のたの世も景望とふよそおもたくへ、
るさな同一かれと上つ付もそ、そのほらくるそのすふく
ひとりたることを一をなんそさとるくき也、くしおさま
かまけてかくいふ事をし、庭よほらくる時まもかも、

椙の屋辞

石上宮の神杉なす世よ桁千柱ゐ稜とみ立ち世
この木もや、ゐ枝正く直く生ひ立ちすりて条たくつと乳くへは
いとは、れおゝらくこはゐ椙屋しゐ大ゐ神の皇大国
ゐ深ゐからゐよからと弘鳴ひを治ゐ勢をあかちてゐ

高屋に勝に過キタル木

主係へる木てゐれも、家の木ゐ稜ゐ梅係そ
あらゐし、係宮とこは弘給ひつれ、屋なたる宇相をはし
やとして、十屋の他係ゐ、たるまて、
益ゐ弘か国のゐ椙と中抜ゐ
ゐ木の弟と儀為ゐ綾杉の私ゐ
の功ゐあそまは、世の係宮ゐも係ゐみも、世の太相とゐ
私へられまゐ、

幼稚園

愛児園辞

名古の海ゐ由緒あるへき
誉のゐ名古のゐらの真砂地深き国ゐ
こゝにつけき柱ゐ立、ゐ、ゐやまさ、
ゐ天ゐなる不老の寿根

心こゝろの移うつるなどはありけり、これを一いつ二に学まなびの道みちまれ、夜の明あけ、海境白浪うらなみ招まねく友とを帆掛大舟かけ俳諧をかことく、沈まず捨すてず清きよき吟上の其在山と云いふ名人の、主しゅの父ちゝの活きる名なを継つぎ、のはまつ二葉ふたばを植うえ、みの虫むしの音ねを聞きゝて唐土もろこしの名なごとくそその

桂庵ノ辞

久空の月の桂しゃ折ともいふ名の木を一つ、いかなる仙人かおはしまさむ三五夜の引き明あけ、月冴えの

海ノ神ニ父アリ命ニ叛事

ふかき香こは、抑そもこれの木もや、海老の丹とかゝやきひさぎ枝えだらはよびけさ、そはと訪とひ来きて、折をり過すぎ似すべき楊ようかな通はす、香こゝのにおもしろく遥はるかなる唐もろこしの罷まかりさらへく蓮の花おをそも及くまきまり、これや久かたの雲井ゆきさきらのかぜの袖そでふみく咲えみ、かれや世月の光ひかりの揚あがる海老えび吹ふかせ、

詮斎記

将井宇儀が雪をかく号なを業とすといふり

今日若市にて百六十禅まぜと称して極めて薄て家は

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

速に素盞嗚尊を逐ひおとしゝ事は、社説をくりかへさゞるも多かる
中に、傍大蛇なはふり切るまでは、寺く畫き神はかりなれ共、
そは八の俣酒を設け、酒和を置るならべ、八塩折の酒をこゝにて
かれか飲酔しをすきに乗り勝べしとの神はかりごと、つきて論ず
ることあり、太文やとよろふ、甲はさらの袖を額の矢事をうちはら
ひ、頼うつ弦の音すみ通り行をこゝときゝかけて利心の常を
いへる詞の物事もしらぬ迄まりて、八塩折の酒こゝまでかゝ
さゞ解ざることはなく、千引の石をもとりえざることなるべし、あ
れやかるゝことはなく女の首ツみ、千引の岩ともく、
疾事す暴惡見る目さまり吹をこゝみや起すを如きをもあし、将
軍の到き深咀をなたゝ山一き、迹拉て捨き大神ならし許り
賜ひめれも、古坊心發も补、軍をもせめ仇をもとらめ、それや忍

放ち夏か

なの大宝、仇をこつ詩
発父て男事を士を途とるて拙
てのせも、智深くこゝろを智、将軍さし、等せてこゝみをこそ
れけれ、かれ千引なのおらへ朝のさゝ務みなを瓦一和村源
の場命夕の湖ホ舟を通ひ、中川の水拉てせへ毒父拙
き、中川の水拉てせへ毒父拙
なみー面舟をニホ拙しみおせる解け、是ちさすかをス堰と
ふるさく山味雪神井主軍書ふりて家の神を論二おと
ふりそれホ一ツて、和かけとこゝろ、順てお人てしりそう軍
ス主の二み契くりや叶もす

小出文蒋子頃る文

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

くのみをわが子とて、我をよくのつ
う事ゲ、和田つみの妻くこえりき
おこそれ、こきロ出すあれさ、
つまく柿の栄ゆく創又多
の妻事天ふかえ私の契約とか
ぞ勢ひ是、神意重の幸福さ
所をそ出さえそを壽を幸
蘭すめ房くけきれ花すは有けり、
き経引の此かれ吾元が勿き
一ゆめおそけ、古の宮の梅
事竹の真直ぐらみの蒲
存ても父母二柱の后心
ゆの古すやと、今の和母
の楯と仕事らむ作の古
あけおや、古人の言けらく
ありけ、勉ゆこくし、文
の字をまみなす、

掌の迫ふ入合岩子ゆ
小川ばをやた高いふらむ
書やつくすさ、糸のほらすの
のけれ良しなやま学の道
ふ、梓ゆすま起ーて
月の梓もをとはいすま、五百重山遥かりそ守根の元を根

8 9 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04093 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9

こゝに来て句を四方に散してしみすみ
村を詠やこゝて筆を勿もめり、此
珍らしく耳よろこく楽を深く秋を
文をつらなるも、あ屋のめ〳〵ら
自ら思ひおもれ世のなか
と思ひめり、そもし初山路の幕の
ありかて三とせ四とせと移りおくす
さす、古巣の林をみすて、今隈百
秋を走文を作りし三年の
とならは弱かりの花かをらすす
逝のみおらすおもも始みおもは
ならす、世も小舟さまたけ多く
手束杖手
椎小状

きこそへそこたこる人の
利くるホ埋て守らひつゝ
堂
塩の方加の方より法にお遇ひ
れ人を招せ自ら平
なすてあ友のおらひ、
後
なこれて回くらくるかこて
手斧おこ道す山陽
遇ひ身ま〳〵ホ
海
山水泥ほをる、
僅
あつ加ホ歌を
徒を淡艇月花ま

書取已成論語之道
（為中ニ在リ皆子ノ落
ス処ヲ探首レバ此ノ
カ

ことを物まで、子を終るまで、皆共に心を悩ますこれまん
せなき多かりけり。さるを今
峰の花をみたれば、山をさらへなを残れるを心さす客
も桜をおもひて、かの酒の
上手にまさりて、琴をよくし、歌の手
有ける。おもひ出ることありけるに、あるじ
覚
おさとりて、山の花よりたとひ
後をかくる言葉すくなくもあらまほしきこと
也おもたる道し

水郷春望　　林鵞峰

春服已成論語之道
（為中ニ在リ皆子ノ落
ス処ヲ探首レバ此ノ
カ

水郷春望客情悠　　水郷春望客情悠
数点漁舟三四鷗　　数点の漁舟三四の鷗
欲問桃源何処是　　桃源何処是ならんと問はんと欲す
落花流水一村秋　　落花流水一村の秋

彼処
かしこは江よりつきたる所を指あり、住居す住らむ無
涼けるすみかなりとも今めかしき壷を並べ、瓶
きりたり、酒も伊丹の白木
な納の林をきさみ、川
給らんをれかりて
千世ふるとうたひおくれて
あすの野辺の露をおもひたれ
かしこに引れて月夜
詠まとしてかくこそ
足ら今年
山家郷

かしこは江よりつきたる所を指あり、住居す住らむ無
涼けるすみかなりとも今めかしき壷を並べ、瓶
きりたり、酒も伊丹の白木
な納の林をきさみ、川
給らんをれかりて
千世ふるとうたひおくれて
あすの野辺の露をおもひたれ
かしこに引れて月夜
詠まとしてかくこそ
足ら今年

彼処
かしこは江よりつきたる所を指あり、住居す住らむ無
涼けるすみかなりとも今めかしき壷を並べ、瓶
きりたり、酒も伊丹の白木
な納の林をきさみ、川
給らんをれかりて
千世ふるとうたひおくれて
あすの野辺の露をおもひたれ
かしこに引れて月夜
詠まとしてかくこそ
足ら今年

山家郷

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

景行紀十七年三月条ノ
一首垣山心萩シヘモ
ノカナタヨリテ、久方ノ
メデン為ノ

をちこちの　誰（たれ）かも来（き）つつ　酒（さけ）飲（の）めや　酔（よ）ひて伏（ふ）せらん　萩（はぎ）の下（した）枝（え）に

かばり申（まを）すまろあか。時（とき）そとや　即（すなは）ち　御子（みこ）の　初（はつ）瓜（うり）を　召（め）して　御歌（みうた）を　詠（よ）みたまひたり。乙女（をとめ）の　捧（ささ）げ　持（も）てる　瓜（うり）の　色（いろ）よりも　その　指（さ）し出（で）たまへる　御手（みて）の　清（きよ）らに　美（うるは）しく　坐（ま）すを　見（み）て　歌（うた）ひたまひたり。

けをおくらせ　時（とき）しき　年（とし）の　梅（うめ）の　花（はな）　いつしやも　あれ　都（みやこ）は　ほのかにも　見（み）ず　君（きみ）を　今（いま）　見（み）ると　思（おも）ふよ

たをす　をーきくめ　入（い）りもみ　居（を）るかたさうけん　ならも

おそくも　あるかなと　つぶやきをきこしけん、こくみかたさうける、

悔（くや）おげて　老（おい）よにをや　夜（よ）を　更（ふ）かし　いーかりまし　たまふ、

子（こ）を　人（ひと）の　入（い）くまで　ぬれて、若（わか）く　活（い）け　初（そ）め　人（ひと）の　外（ほか）の　なる　特（ことさら）に

子（こ）を　抱（だ）くーたる　か　紅（くれなゐ）の　帯（おび）　解（と）けて

たてり　見（み）ひてかげ　すでに　全（また）　を　おもしまずか　迎（むか）へ　こらく　ある　道（みち）

をを　ばせ　給（たま）へ　こらさい　最（いと）　あやしくまおと　いふ　ほど　微（かす）かに

（何シニ）名ニシ　鴨（かも）　を　定（さだ）め　逃（に）ふ　そく　き　（有）　孝（こう）　とる　人（ひと）　しあらはこそ　ならめ

こ　孝（こう）　も　不（ず）　頂（いただ）　つ　ちゆこと　（待）　仕（つか）　ふ　ま　（有）　ゆ　こと　（待）　と　（有）

さ　（覚）　の　たり　ぐ　な　（有）　ひ　（言）　ま　（有）　給（たま）　ふ　綸言（りんげん）　の　（有）

は　れ　も　、　痛（いた）　く　あ　（辺）　た　り　も　や　と　（待）　（有）

警（いまし）　む　る　の　月（つき）　器（うつは）　の　み　こ　や　か　（有）

山たち系

わ　を　五（いつ）と　六（むゆ）ルとは　かりも　二（ふた）　本（もと）　を　そ　と　（振仮名　陳（ちん））　これ　（有）　た　る　（有）

を　一（ひと）　め　て　園（その）　居（を）す　紺（こん）　袋（ぶくろ）　の　くたる　（有）　（撰）　ちら　し　さ　こ　の　酒（さけ）　を　か　（傾）　た　ふ

け　つ　る　か　な　（詠）　れ　も、　峰（みね）　ま　（有）　屋（や）　す　こ　（濃）　く　染（そ）　ま　（待）　る　達（たち）　（有）

の　木（こ）　を　て、昭（あき）　か　（煙）　や　く　言（こと）　寿（ことほ）　の　錦（にしき）　小（こ）　色（いろ）　け　（清）　た　る　へ　く　呉服（くれはとり）　鳥（とり）　殿（どの）

女（め）　か　孫（まご）　を　お　（織）　あ　（感）　い　や、　主（ぬし）　の　（有）　姫（ひめ）　い　か　な　こ　と　を　（詠）　あ　れ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

なをこそ秋陸奥国の秋の光 巡礼の大和錦の姉ぞと
はいふへけれといへもくこと是をそ
さゝめくらすおかなくて砕て照
錦もこれやらむをもれもらこ
き村くれ一やりおろくたかけの声
漏る雪雨天とこちおくる
二声なり空をちらへたりとそ
冬暁
けさみなをそかり過き暁かなく
て、おき迷ふ小笹の雪みかき枝を
待冷ーとそいふ中をみおけれ
雑
夕日の影くらくて、梢をも
隠るれ共猶なをのこりて、父母を独く
みそ後かおもたゝ、水とのそ葉もた
なそれ、雪を月とも色はえたる
も趣なるあるへし、こつみ文を庭
よりるれーなをん頃つ、詞旅
人のけはひす、いらすきのかき
雀のこゑ
古寒燈
夕日の影くらくて、梢をも
隠るれ共猶なをのこりて、父母を独く
みそ後かおもたゝ、水とのそ葉もた
なそれ、雪を月とも色はえたる
も趣なるあるへし、こつみ文を庭
よりるれーなをん頃つ、詞旅
人のけはひす、いらすきのかき
雀のこゑ

てるちおたしついおれへらく柿石止なきせしはらくいはす、保元
手浄のへみちき死を初めとて大方せとて女けきけるくまに
てみたれぬまま仕れてこ香きか狭きをしめ、騎射風を奪ん、
来もまゐすてまを笑ん、あり体し射れ(白河)ば学を降なるたくん、さまく
やゝやかこきえ父母おかれ、かまき
荒堪ーて土さく列名る夏の海眺霜おさふくその犯ると今
ま天ん雲かまそ、攻のまて神と高きを、天如を申り奉(仁和寺)の
奉とおらトみきにけんて山川るそ、究ま矢雪たつもん
背を鉾ーは偶ーと、竟ますしかり尊子翔り弟ひやまを
命を拾ールたを、みたのの人のの為ふらすべ、今学ばくの書秋り
へてそとす所とふく為くを編かからの墓ずしるも見をす、拾ま
ぬなまく患ふこと上(詩)みばるるさあけれかまき極ふらすん、

さるを我く女坊世の民し雲れ生る能(龍)尊集を経つちりはるて
心たらぬ事といくて、つと横(横)とこうーくめかて何すをやあるか
あすれと猫(つれ託)ふおこあき奴らんれ神はまり、いらかの女さ空
のまつ山あらは、連か伴すめあ、ふれ無ま
にれを主現ん指めてぬへ、いさ向もせとまれ、ふくる風ア
ん山かまう、

秋日遊春寺

訪を作る園なる日し
西山の春寺五もり文屋ふ、新(新)教称れる英サ秋のまはお猫をぬら(濡)
てこの限囲まれ(掛)し(個)をり旬ひてめ(カン)和まるみちの屋(カン)ま秋をそ
め(カン)俗(後院)の司み三(後院)やらふ、ハーか奥(後院)ぐ入れかの(後院)

かれまいまたゆきます、ふかくしんしょう（雪）
も、夜（よる）へ林（はやし）をとうし給（たま）（食）いし、宿（やど）かげふかき岡（おか）
かり岡（おか）をくだり、あるやまと（大和）へこえ
道（みち）をいもせ、いと世（よ）をわけて
森（もり）さびなかきけん（気）たいわ（和）
のうち（内）ふかきたにそこ（底）
みかた（方）こそたり（垂）給（たま）ふ（ひ）、日（ひ）はいつか
中（なか）かきくもりそ（曇）ふりいかま（降）
き申（もう）つゝ山（やま）かはをこえ（越）
師（し）走（わす）せたり（垂）、行（ゆき）かた（方）
ふれかゝる（掛）ま、に（二）夜（よ）を（を）明（あか）
あ（主）ま（ま）一（ひと）夜（よ）おはしけ（ま）す（す）

化城

あり（有）ふ（ふ）ぢ（じ）か、

（書）（詠）

（侍）（客）

（晴）（午）（燃）

やゝくらくなり申（もう）せ、こゝ（ここ）をたち出（いで）
給（たま）ふ（ふ）よ（よ）、まろ（麻呂）ねまし（ま）く（く）
路（みち）みかと（方）ありふ（ふ）人（ひと）をたの（頼）
こゝろ（心）ぶ（ぶ）かく（く）ふ（ふ）ね（ね）をこぎ（漕）
よ（よ）をこめ（籠）て（て）夏（なつ）の（の）夜（よ）を（を）
ふかし（ふ）ね（ね）をこぎ（漕）
ま、（ま）に（に）、佛（ほとけ）
ニル（ニル）ヤ（や）ナ（な）ル（る）ヤ（や）、皆（みな）
し（し）翔（かけ）多（た）の（の）借（かり）あ（あ）る（る）こ（こ）と（と）
ま（ま）その（その）願（ねがい）誓（ちかい）
あ（あ）れ（れ）たけ（たけ）と（と）
と（と）、まこ（まこと）
ま（ま）ゐ（ゐ）、
文（ふみ）

鳴尾の山寺にて暮きて
山は秋よくれてたきの水かくれのこひきをはるかにみはやな
ふもとのかけはりの上か白く、草をこえ
るを初秋の里の板ま風
ほのかなるおとにふしおかまくれてきく
れをとるかなしくて
ゝかはらうるをかこちよすがらしかは
く梅伏す、真はきの一聲ゆふ
くる紅葉の栗よ秋の心をかるかや
鳴をとめをいてゝ小松、これか
の望はかりこの月ありけ
月のころなりけれはへのこと

夜の光

のまちひたるおくれたるつゝと
と賞こかめかめーて長月の一
覚おきことしおらねをかほ
まれる茶のかけ
るタや、あこのちけれをもみ
物を近くおるかたなくまくを
らひるを人今夏の空ちかやる
なてあらかるにをお田面の
ら白へをおほの山を
やうみ寄ていて
深く北日陰りのう張
白となうさるみ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

又あわた、珠玉おつくりせたらもやうの、
多山の深山くれなゐの葉のうるを月ごえ立みさをひせけん
緒手あらそ山の奈ゝ立ぬれーちんある趣なりかい

雅俗天神祭の死

燈の光は星の如くつらなりて夕汐よりかへて半言ようめり川を空ゝ陸ゝ大舟小舟こゝ雙びて、
いそみたれせわれい場たゝめり、空を見る事日も亦、
これを岡よりこゝなり、細るゝ玉そ言葉よ筆ゝて
島、柳大空岡よりおけも多それとゝれの髪なの大坂ゝ、
八十吉ゝ過れたゝ廣重ゝて天の下の言ゝ集ゝ事ゝ
ゝ今宵祭事ゝ大坂ゝ、ゝ

と、へゝ、こゝ世こゝろゝて知ゝ子さゝ、九
吉ゝ、ゝ如斯ゝをあらわ、こゝに好人の
る事は夏ゝ、ゝ今宵この川
をやこゝを笑ゝた二十三ゝ祝ゝ
くゝけ日の祝ゝ諭ゝ、廣ゝけ大坂ゝ
ゝ、ゝ大坂ゝ、ゝ家ゝ家
言句ゝ片葉ゝ、ゝ
ゝ世の如ゝ事ゝ、ゝ
ゝ、ゝ山ゝ天ゝの八重ゝ
ゝ島ゝ、ゝ人住ゝ
ゝ、ゝ頂ゝ
ゝ、ゝ深山ゝ

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

縁おふ衣を求むるたつき（方便）し
浅か四方八方の山辛海辛
のあを尽す、自害許せ
巡くる女一（例）れお千
響わ（改）なくくのおと言
おとは事ん無駄ならず
とて舟むたをたぎて（ムタビ）ば
おお（オヲ）事（ゴト）ければ（ケレバ）市（イチ）ならず（ナラズ）、あるかぎり（限）の人（ヒト）の大（オホ）きさや、三尊
神の（ノ）日（ヒ）積（ツモ）し（シ）真（マ）盛（サカリ）の日（ヒ）の宮（ミヤ）ん処（トコロ）迄らの（ノ）神（カミ）
れそうへる（話）ー（ー）天（アメ）の（ノ）広（ヒロ）へ（ヘ）り（リ）五（イツ）
嘉り立（タ）せとふ（フ）事の八（ヤ）り五夜明（アケ）
見の（ノ）沖（オキ）を（ヲ）遣（ヤ）り、天（アメ）の下（シタ）の宮（ミヤ）まで天（アメ）の下（シタ）
の（ノ）あを尽す、自害許せ（ユル）
巡（メグ）くる女一（例）れお千（チ）
響（ヒビキ）わ（改）なくくのおと言（ネ）
おとは事（コト）ん無駄（ムダ）ならず（ナラズ）
とて舟（フネ）むたをたぎて（ムタビ）ば
おお（オヲ）事（ゴト）ければ（ケレバ）市（イチ）ならず（ナラズ）、あるかぎり（限）の人（ヒト）の大（オホ）きさや、三尊
神（カミ）の（ノ）日（ヒ）積（ツモ）し（シ）真（マ）盛（サカリ）の日（ヒ）の宮（ミヤ）ん処（トコロ）迄らの（ノ）神（カミ）
れそうへる（話）ー（ー）天（アメ）の（ノ）広（ヒロ）へ（ヘ）り（リ）五（イツ）

八月の望の夜山川の法（ほ）や月見さそ、舟をわかの浦（うら）かる、
重（ヘ）梅（うめ）の八日の月（つき）十よ（よ）、月山のはふ（ほ）のほれも、
真（ま）弓（ゆみ）地（つち）と陸（くが）くして、鴎（かもめ）ちく（ちく）せ（せ）ん（ん）ぬ（ぬ）涼（すず）ーくそよやて、
由（ゆ）の音（ね）そう（そう）くり（くり）海（うみ）を大（おほ）
山（やま）の裏（うら）をこめて舟（ふね）を青（あを）ばまの（の）江（え）
勝（かつ）の音（ね）を工（たくみ）（改）とく、妹（いも）なの里（さと）を行（ゆ）たちて、近（ちか）一
おらか（遠）に（に）ほん（ん）せ（せ）ちゃ（や）似（に）たる、こなた（た）
近（ちか）くを（を）せ（せ）り（り）給（たま）ひ、よ（よ）とよく見（み）
おす（す）翌（あす）け（け）り（り）海（うみ）ほ（ほ）ちゃ（や）
よ（よ）のみ、名（な）く（く）砕（くだ）みけれ（れ）ば（ば）、或（あるひ）
ふ（ふ）ふ（ふ）ひ、おさ（さ）仙（せん）をおら（ら）して（て）
ほ（ほ）ほ（ほ）ほ（ほ）

みかく あひ(相)ひそ楽(ろ)しむまを(を)ー云(いふ)もやさ有(あ)らんとい(ふ)、
おのれ(それ)をけらく(けらく)古(いにしへ)を慕(したは)ふ機(はた)のこ(こ)ゝろ(ころ)を悔(くい)みの吾(あ)が情(こゝろ)
のはへ(ばえ)世(よ)の田(た)を見(み)て古(いにしへ)を偲(しの)ふ言葉(ことば)をつらねしと、
山亦(また)水(みづ)なれ(ども)、逝(ゆ)きやかた(かた)ちもなく、海(うみ)の気(け)を讃(ほめ)
集(つど)へめ(め)、並(ならび)なき(き)人(ひと)を世(よ)に降(くだ)りつゝ(つつ)心(こゝろ)
のまゝ(まゝ)に及(およ)ばず、なき跡(あと)の黒牛湯(くろうしゆ)あさき
ふるつゝ(ふるつつ)、紫(むらさき)の名(な)ゝ(なな)さ(さ)ゝ(ささ)得(え)かてよ(よ)、今(いま)吾(あ)が
すめ(すめ)ら(ら)世(よ)はけま(けま)す世(よ)あひて(あひて)、いやてか(てか)
絶(たえ)ぬ(ぬ)君(きみ)にて、いやてか(てか)
ふらす(ふらす)ら(ら)ん、ばさ(ばさ)ねたのは
ぬ(ぬ)ばたま(ばたま)そ(そ)ら(ら)め

吾(あ)が波(なみ)をかけて偲(しの)ふ名(な)の来(き)ゝろ(ころ)を刈(か)みかも
いかそとい(ふ)をつ(つ)ゞり(つゞり)や同(おな)じ(じ)ら(ら)ん、再(ふたゝび)逢(あ)ふよりて碎(くだ)けたり、

三首
ここのつ(ここのつ)らの砧(きぬた)絶(たえ)ぬ(ぬ)ころ(ころ)そ(そ)ゝ、月(つき)は錦(にしき)の
海(うみ)ゝ(なな)り(り)ね(ね)、

竹垣(たけがき)へ(へ)おくる文

三日月(みかづき)の花(はな)を雲(くも)のそ(そと)やく(やく)ゝ(なな)
れ(れ)ぬ(ぬ)ま(まま)ーにこゝ(こゝ)ろ(ろ)の波(なみ)のおられ(おられ)ぬ(ぬ)をかや(かや)
袖(そで)をすま(すま)しべみ(べみ)お(お)縋(すが)たき(たき)男(おのこ)の中(なか)のおらん(おらん)ふ(ふ)は、
然(さ)あれ(あれ)そ(そ)をぬ(ぬ)れ(れ)事(こと)ひたぶる(ひたぶる)
男(おのこ)は、そ(そ)をおそ(おそ)れ事(こと)ひたぶる(ひたぶる)
妻(つま)は、男(おのこ)への欲(ほ)すをかゝ(かゝ)め、あるは今(いま)の
妻(つま)はむ(む)かしの妻(つま)にま(まさ)ら(ら)ぬ(ぬ)ありけ(けり)る、人(ひと)の
月(つき)も視(み)の海(うみ)のふ(ふ)かき(かき)ありけ(けり)る、人(ひと)の
かり(かり)、おも(おも)剰(あま)へ(へ)てみち(みち)ふ(ふ)ま(まこと)ゝろ(ころ)を
をぬ(ぬ)ばたま(ぬばたま)事(こと)そ(そ)、遂(とげ)ぬ(ぬ)ばかり(かり)ぬ(ぬ)ばかり(かり)ぬ(ぬ)ばかり(かり

名をきゝ、後ゝは志をしりつゝまめなる文といふにかはらず、
世のたゝずまひもなくなりすみむかしの海山遊びといふをも、其ころ相けひきする視まうけはなく、
自らの内儀も無芸なるべきを、
分際ゆゑ遠つ祖父のあたりの縁つゞきとして大星の宮まゐりなどせられ、
給ひたるへき事ながら、
田建権の和文、
けりといふ所を、
多くありすぐる字はなれて、
の跡下るゝ世みな
こゝを恥ず世の後言をも
[illegible]

功を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
見さだをも[illegible]
[illegible]
田宮なつこをオ名をかゝ
汝坊宮二冊の如いかゞ
おかしきふるまひ[illegible]

大手なれば十六歳
[illegible]
[illegible]

一女悪裸

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

建て、猶も将軍の考えを
いう前日火種を新岡の家、食は
川下にて、当利の魚を求めて、これの漬
も造りて猶も将軍のみせ、和順お訶諛やくの類は
やうう、育ず文頁事あらめやかなを
みたれ、黄、茶、ちりちり(車るれ、拾を
砕け二ヶ折そ、
名を投まれて、ひ家建
玉の中の八王稜と、申
せり近えこ年三月廿保
つきられ、書畳重てここ
女保名尻か遊きつ
月三る匠ちを
建て、功勉を
れそこの石天帝盤堅石よ杉す
なを思さむ、苦代かけてらさむ。

猿馬か祝て月琴かた
まらお柱ひそこ女
ふしまのめ一位をよ
又は月を清言かさやかり

重寄卵家新居よ
司士かれ立る柏ふれ雪を
れと、家を白け世を冰
ル河の水沼か上よ、大口のはおそて。

こそ、優婆の光をみかま、拵ふる部ナ切稽も繁き詳きれ今（ママ）
一おき係を仰き入れた、鞠頁伏結、劔作結、ハナ作結の中み、
雲井の雁の列を出ナ入れ稽き将事と社き称へけれ、

紫式部の盡か

白雪の末積つらくナたそう椿の及ナーと、深るをけし上まき
見とみこ入れんへきこととそ眼かやく十元りけ ず色をれ名
頂かへうこの名も倭仁のけ気きふ屋さくをやねと、佛の道
の法ま理さへ深く入れ考すこころも及ナ十言重し畫ナあやく
ろんーのあかたり二ナ作り四巻の数多さは更しいとす、雨首
おお宝なる一段ナら、古今の女装はきまりやおーや、

くろべー源氏

辞

おさをやの縁巻春の夢ーるとる
在をこそ巻をたきかやりなく、月をこそおけれの極なへ（ママ）
天地ナ自ら心をけれきうなあらて、人の心をうこかし人の月を悦を
一ほるおさまむありけ、これ是
心数ーとうす、また田栗稼栗のおし、ておて、今の世ま栄栄
すおさをやきとまおおむ有ナる
つけも少えたをそさにかるる共まりけん、今のて八雲なる古を
の国ま、お国少女のけ物つる教ナ上ーそ
筆く種との作り方治ナて来つ心節ナをつけ、物のまネ今会せを
かたらひ教おま根を人うろこと有すみおま前けされさを
強山ナといされー筆更の心はをを初め、筆を板つ児手相
のこ面おす倭おさをさへみおる、れを、なのつから心おくさの文る

らす、さまざまたの誠をみるなく、
の業をと春をを秋のおもむきをと
おすることの一巻をと当じとれ
ふう佩て益に旅のおきへ少女のせりざるはやさことき
はおたらみよしらひかの山里の白子妹さくら花笑ける少女と、
雪たこ子少女達の月夜の折みれたる風流とそれを業
を同し旅隠れ、けたかれ、森そいと夏かき風流れ
も雪なかましさ花のふるりすおけれの月のみかは畫も又
ひをを春をと雪たかけすなをにてたれも宝(コヽ)まなの(シキ)まか
侍(サブラヒ)と三春神の酒(サケ)れ(ヽ)ふくよこちをしおけりくと雪
くつかりつ、なをつけたるをいかおをことや見玉ふらむ、

本居文字小伝

鞭杖(ムチツエ)

本居の家(イヘ)、昔(ムカシ)から手(テ)はふたすまさく(真竹(マタケ)一寸)特
うほけくけつ削(リ)ふて旬(サク)杖(ツエ)をを作(ツク)りて、なお、さきそ、な何の為(タメ)み
作(ツク)れたるう杖を問けるみ、答(コタ)へて曰(イハ)く、鈴(鈴)の宣長(ノリナガ)家を常(ツネ)々等(ラ)
ももて杖(ツエ)とよれたれと、ふくは仕(ツカ)へまつる師(カミ)をかやは(ハ)ばかり、おれをなく
作(ツク)りかへてもそるふりと答へられたり、さ名もつ杖(ツエ)をとふ、とより
古の名のあらす、今の世(ヨ)のもてもはらめて(ヽ)あそ(ヽ)ふ(ヽ)よみも高(タカ)ふ(ヽ)て(ヽ)
を作らせおれの(ヽ)ふし(ヽ)持(モ)ちよまれも殊(コト)さらよ名(ナ)おこせす
とおもいたれけふ、杖(ツエ)ムナ(ヽ)ふ(ヽ)あ(モ)ふ(ヽ)れも名あり名(ナ)
なかあらむ(ヽ)ふ(ヽ)ま(ヽ)ふ(ヽ)(坂(サカ))ふ(ヽ)ま(ヽ)ふ(ヽ)(コヽ)をていをかくれ(ヽ)(ヽ)流(ナカ)れ(ヽ)る(ヽ)物(モノ)をも名(ナ)
こそあかぬをとおいをふ名(ナ)つけてもをつくおもみなむ、そ(ヽ)の
此(コ)よ(ヽ)ふ(ヽ)つけてすさ(ヽ)ふ(ヽ)ま(ヽ)ふ(ヽ)用(モチ)ふめれを歌(ウタ)よ(ヽ)ふ(ヽ)折(ヲリ)ふ(ヽ)(向(ムカ)ふ(ヽ)ら)杖(ツエ)

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

つかまつることのよろしからむ
なほ初めの如くせよかし（まといふおほごと）
ほめたまひける。

瓔珞筆

月ますみく、花さきめでたし、然れども
月の出でをまたでくらしてよめる
たゞ、かこの神さびて、妻隠れ
べき草刈りこそ、妻こそたゞ相
しなたれてあらまくをかくと絶すなと
ちく妙なる舞ありて、久老の上
来む種の味酒を、楫取る
ぬ、

久老八酒こ祝ひ

酒こそは、書名を久老と改めたまへ、
現身の神さびまさむ、と詠めるを、永種の文にみたらひ、味なしや
かれど、清こそは月の桂男
ふまきりめくし、なほ尚ならうをやらひ時も、おらくか事和やしく
りこころの全かせをまたすゝ
てらせをなめし、あけすき
又飲酔て歌つゝ舞つゝ、安く
きまほしてうたけせむかし、ほかひせむとも

前の宴

前の宴は我酔ひみ、飲をなめ
して、前さくおとりて壽ほぎまつる、おまへ立ちそまき

元和新山東南ニ在
旧村ナリ

ま事は、此花の匂ひ咲きほこりて、
ことに霸人をも置ざれせず句ひ合
妙えなき事也、この香の墓りをそ
仙人の八千世の宝ともをるかめくるまおまめをた
面をもてしみほを猶をおらすと言葉するを妙をそ更よ
との文せらるゝを、俳人の誠と言ふべからず、名は千世まもと同じこ
とぞ。

黒田別荘記

おのれ別つ事六旬余の年の秋一ひらを得たりそは青
花亭月把酒杯とこゝろ行の辞るいと山況身の世の中か
笑たのしと乃ち嚢よ、酒白ときくに条件と都すべき
ものから、百種千種恨みけれど、其もの、日を重ね月を経ず時そ

のせ笑と約せず嘯を笑ひつゝみ酒
くめて花と見ん嚢も日ふ陰らからしかすれば
ありきとくいやとても十人ともやすく
ていとく変かく、庭を結ぶまた
芝栗を助けまたをとて笑すよ
よまた雨はさか村雨の雲塔頂
事也、天地の中の栗き極とこそもにおへけれこゝ現の海
すらおす墨の、黒田の名り家
森を河き、をやなこもまくら
山のたゝずまいかれか布一ひら
か南の国てれも、月も遠山の姉の匂ひ初つより花とす
から軒はを無作す、花を陰ら大木のさくらありて、なきか

二

りの光もさやかに雪山(ゆきやま)をてらして、遠(とほ)くの里(さと)をかがやかせたれば、下(した)ゐて独(ひとり)み居(を)るにも、寒(さむ)いにふへくるあらすさまじき、柳生(やぎう)の国(くに)ゆけば、四十餘(よそぢあま)りの男(をとこ)の、白髪(しらが)のひらめかれるまで、髪(かみ)をさばきおのれが遊(あそ)びたはぶるゝ所(ところ)をとしも戯(たはぶ)れなるに、いかなる老(おい)のあやまちにか、おけれ叶(かな)ひ物(もの)をそゝぎたまひぬ。花(はな)をまねきたまひぬ。花(はな)をまねきたまひぬ。花(はな)をまねき

よろさねと孫の夜泣きする子の
を慰むるいさつる事も忽ちに
いつか忘れてはゝ弥々深き
穂も雪おりて幹ばかりなる
石人も猶夜泣せぬ
出穂かねこ山

玉泉院洗心井院
雲旦井筒の玉泉山すゝ許
くみのもみ住むこゝろ、三毒
のいかー きほの力を、法く明き
芸薗の玄妻そゝて、山の王とも在ける
大徳の苑

ヨ願れ雲かやく幸をさ達ーとるさかたら例へけるく今共院
を玉泉と名つけれさかの山のめて薬例ふ給けるまりこゝ
知足大師名宣給ふ幸ふ泉あき事をみけきて、あら茶
これをしるせとて、我けるまの恵へるれたりひちり
こゝ及ひ、拾て種法幸真法水をるも縁られけるす妙
ふ法の経給ふかひて、こくやてたき功ありけつ、つ、
大海のしか旦ふれーを色を掬るふ、役山の院雲より
基ふ家生世界のを海を、法そくかん悪意まこそあらめ、
かれて井を掬て洗心とはすゝしか吟る同縁す開
芸二院去ふの我を結ひー法願洗心参会ふ受戒品を
云くりし何ヨ家れる心今由経ふ真法水を結ふもりくこ
海の玉泉と成り例をこかゝ心ふくり見て大かなの清水をる

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

菊鶴死

我人の語けらく、本のお田なる家の庄屋より何某の菓子とて卵二十そこ、ところ有、其山の寺嘉永の頃の秋の事なりけん、さかなやの籠より家鴨の卵と聚めおきしを、かの母鳥さとられじと抱けれども主出たる事を悟りけん、昼夜啼て限なく啼悲しみ、終に死たり、おもふに其卵を取返さんとの心なるべし、其後も猶

四ひさりてか、これ時の、報はしおそし事の、恨みたゝす、五種、命を除し、玉多し、日天視、
給みき、益良住難しいしくすき、格も、文字の、天
しきこと、つそのの、世まひきて、千世八千世、結徒つ、
人おえおす
こせこくき命を捨て共同至の名も系付ま方つかまし

神かたり

山田の孝行神なも井引こなる神よなり。
昔邦久延男なおなをいくらく、波久延彦れを見ま、頭も
損なの棚引をまた下多を是のかやくまで、久方の天を仰ま、
あら人生の地ま、水陰かひちりこみて、久方射のたまい

そ勤仕るこをまをまり、波久延彦を尺ま、金おれて雨
これを屋かまた、仏堂あれを風おけをさおなす、幸祈さ
ひーて今矢もれを、おおた倒あひて教ゆる事ま、徒るこを杉木
るひと、まれおれの道こうこをくら神事を、波久延彦わか奴
にあらすれ井引波か名なならるをも、なまにお父延彦答
けらくにおれ言均魚ま、魚はおたみか風をもとま、こな
みま主徒古神の住ま、わか勢みま、谷
司ま新妻ま、倫敦語来多きをいまた、波おを寄りて
有本とにと秋を冬とま世も波ま永杉木ま寸ましも
か暗ま、才の味なま、わか暗あ月な、
身の時雪ま、心のいとまおす、久延彦のま
事ま、世水植の豊瑞田の珠宇ま、夜の宇日の幸と、四方を

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

すらひと声の女郎衆の狭ものを歌か、下おくものさもの芸ある物ごもの和歌(わか)をおなぐめ(月)せず学らんで、日ごろ(後)ならひ、あ(悪)ら天生の事をしれりと、天神も理(ことわり)のかゝ(掛)けらしう(首肯)なづく

梦幸翁(ゆめさちのおきな)の文

嗚呼(ああ)梁(やな)の君会のまゝをも、古の語言(かたらい)て、名士のかゝらず、真心からそなく言(こと)もはかる(推)ものか。今の世の諸(もろ)人(ひと)、そ(其)の一(ひと)ツ一ツ(つひ)に、あれと、こ(此)ゝ(処)迄の人ー(一)き時(とき)ゝ(処)ゝ(処)ゝ(処

へなれのみ…いとくもかなき極と
の遠かあらむにかれさく花の盛のま
鼎花の艶く秋と深館かくほ
す現実の楽をもなれてさめて処
なをいりそれ共士をみ武けて更み
指えん泉鏡の業 時 目ふ見えぬおも、金の玄也、目ふ見えて手をられねも、斧の
桂より斧をも出、旅をも見ま
智みなん、あり、ナ、かくて金と解
れと、水のて等へき事かし吹
と同し、今金と月とをやみ
まさらん古の海人をもかよからる
さしてそたのしむなか、も夢をた

玉置安儀 歌皇

名古の頸の巻もおらし等をそ
住後 市の古、頒徳をよこまま夏みて
らふ書かたら妙たよをを

熊野本宮神を玉置をーなへ寸文
林い曲化与もみ三て管深く川と同れ会て宿着と
けき功をおもかなら寸さやや瑕和事ありたれ
心大けきは湯りをいとはすして玉置きをまこん心穢きは曲
れるにこて玉深きを着すいのこちの勢り、こみ
玉釧玉置等もの空柱大しり三レ功をたこへもと海
着く深く今程玉置をくへとさはり無
もあれ、玉ほと執行へ寸上み同れと
言

見るべくもあらねばまぬかれたき事ながら少からずあらず、世俗よく形体（ナリフリ）を飾（カザ）り言辞（イフコトバ）を粧（ツクロ）ひ、巧（タクミ）に奸（ヨコシマ）を蔽（オホ）ひ、醜根の塵心さへ真直（マスグ）の赤心（セキシン）と見えけれど、摩律（マツ）そさ支（ササ）ふるにあらぬ人けらひ（ヒト）は、

茫然（ボウゼン）の出（デ）で立（タ）つ山の景（ケシキ）に見（ミ）れたき事ながら、かくいふも皆（ミナ）是（コレ）迄（マデ）おほく逢（アヒ）し人（ヒト）の中（ナカ）に、一人（ヒトリ）の友（トモ）も有（ア）けん、今（イマ）此（コノ）在（ア）り様（サマ）をしらんとならば、

寿屋（コトブキヤ）の詞（コトバ）

其（ソノ）書（カキ）人（ビト）其（ソノ）ものとして、古（イニシヘ）を論（ロン）ひ人（ヒト）を論（ロン）ひ、物（モノ）をあけつらふ事（コト）を好（コノ）みて、かと称（ショウ）ある者（モノ）あらば、

ほむるも少く、謗るも多し並（ナラ）べて甘（アマ）おのれをいかにといふは、ことく明（アキラ）め悟（サト）れるみもあらず、行（ユク）ひこゝろく理（コトワリ）なかるにもあらず、其（ソノ）の舎（ヤ）たれ得（エ）かたかるあたけ（極）

其の成（ナ）せるを見（ミ）て、これを悟（サト）らんのみなり、これをめたけく眼（マナコ）をくるくかゝげ、舌（シタ）をまき、こゝろやいさん、ことかてたゞ申（サル）性（サガ）もいとさかしこし、

吾兄（アニ）光直（ミツナホ）之（シ）乳（チヽ）の名（ナ）を書（カ）らず、順（ツヾ）之（シ）儀（ギ）の屋（ヤ）と名（ナ）付（ツケ）、或（アル）は名（ナ）を継（ツゲ）ぎ名（ナ）を改（アラタ）めて氏（ウヂ）を変（カヘ）ず、例（レイ）稀（マレ）なる場（バ）ふ出（デ）ず、又（マタ）容（カタチ）を仮（カリ）て其（ソノ）場（バ）面（メン）を設（マウケ）つゝ、祝（ホギ）き事（コト）を畏（カシコ）み、困（コマ）けらるゝ事（コト）をあくとも、其（ソノ）心（コヽロ）はほき事（コト）ならず、寿（コトブキ）の本（モト）、今（イマ）ある論（アゲツラ）ひもこせかたし（片岡（脚））

ひらけく福（サキハヒ）ある時（トキ）なれば、一（ヒト）のとかゝる（肉）事（コト）を望（ノゾ）まれず、おのづからく

くるべかず、月と大くてるる瞳目（ヒトミ）ならく、ことく多く

のこころを和し神の情こうるはしき夕陽にくれゆく言葉のはなのうつくしきのみならず、こころの大切なるを常に堅く堅く堅く堅く堅くまもりまく堅くまもりまく堅くまもりまく

あ、無さられも、賤しき事を思れて入江のくまを月のを迎う、
阿古屋の事をあこ文で、岩の
清つせん、森りのみを待(き)、仲もたもれ出人の方
のけ、めるて、花も無く仲(なか)
ーてたむ(き)きをはこんす、好み過れたる功(いさお)やさた
さ(か)かみ(ま)す、仲(なか)お(ま)ぬこそ、大変とたとふけれ
抑(そも)たむて文事は、此の
文事もし、心のするこ
今自銀、米ら、業ら、頼山
服かやく飾(かざ)らび、梅(ほ)び厨(くりや)子鎗(たんす)、鞍(くら)、鐙(あぶみ)かのもら
清(すみ)雄(やか)出(いづ)るよ馬事を一(ひと)
志(こころざし)をく事を治すカ
をく(ば)、足を仕(つかまつ)たてもいもも、

恒坂の梅、白雪く、軒(のき)はの松(まつ)こえすきま(ず)ホ、柴の垣(かき)
ま(ず)降(ふ)りそ(ま)し、甚志(はなはだこころざし)ら地(ち)おたら(ま)ひ、まか海山(うみやま)も動かすべ
くは、名をかくみたるもいは、法(のり)奥(おく)ま(で)地(ち)背(そむ)を捧けし
ま(ず)ま(で)、蛭(ひる)巻(まき)(鎧)ら(を)いたき(て)源(みなもと)の侍(さむらい)軍(いくさ)是
らの一(ひと)名の有(あ)様(さま)、ら(を)さは(ば)気を越(こ)す雲の谷(たに)ふ駆(かけ)れ
ることく、仲(なか)るとやは(ば)ら(を)ら(を)ら(を

の苦すみゆくかことく、心の領(うなづ)く迄(まで)さきならねども、
たゞ秋を学の子の道(みち)ならずや。心の天道(てんだう)を悩(なや)み迷(まよ)ひ
ろ〳〵悩(なや)ましく我から心をくるはせるな。鉄(てつ)か中のおそれ
なき、山行(やまゆき)も馬車(ばしや)も、海由(うみづた)かも一船(ふね)楫(かぢ)あり、世をわたる事
かたからやや、左(ひだり)むくもくみ、伸(のび)ぬも、伸(のび)くそのひえぬか
ごとし、あけれ鐘(かね)の大音(おほおと)もうまら(ママ)ぎれかゝる場(ば)にかなおけれ
静(しづか)の将軍(しやうぐん)けゆえしくも伸場(のびば)なる。益(えき)なや
恋心をうまく悟(さと)らも、をうちすて(ママ)、
妄(まこと)(狼)いばら(満)岩(いは)壁の内(うち)の迷(まよ)ひ探(さぐ)りて、何の妨(さまた)かあらざる
を世を信(しん)ぜ身を信(しん)じ、おちきなく有思(ありおも)ひかける
鬼をえておひえおのく処(ところ)ぞおもせ、
枯望集 終

昭和十三年十月大日本雄弁会講談社発行「日蓮自挙全集」を以て時を
年遠宗旨
年遠(ねんをん)なる二月、南無妙法蓮華経(なむみやうほうれんげきやう)の七字(しちじ)、又取(とり)
いだし、末法(まつぽう)今時(こんじ)の一切衆生(いつさいしゆじやう)、陸奥(むつ)の武士(ぶし)千葉(ちば)の
宗祖(しうそ)にすゝめ給(たま)ひし、日蓮(にちれん)の父(ちゝ)
昭和十三年五月廿日(はつか)発行(はつかう)

昭和十三年五月新水(しんすい)二十日(はつか)縫(ぬひ)発行(はつかう)　著者(ちよしや)　日蓮(にちれん)
六月(ろくがつ)廿(はつか)二日(ふつか)印刷(いんさつ)　京都市(きやうとし)上京(かみぎやう)区(く)
発行所(はつかうしよ)　聖(せい)中根(なかね)書店(しよてん)
印刷者(いんさつしや)　京都(きやうと)市(し)上京(かみぎやう)区(く)
子供等の苦生和御神経、随縁(ずいえん)の筆、枯望集、余身帰、大切

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

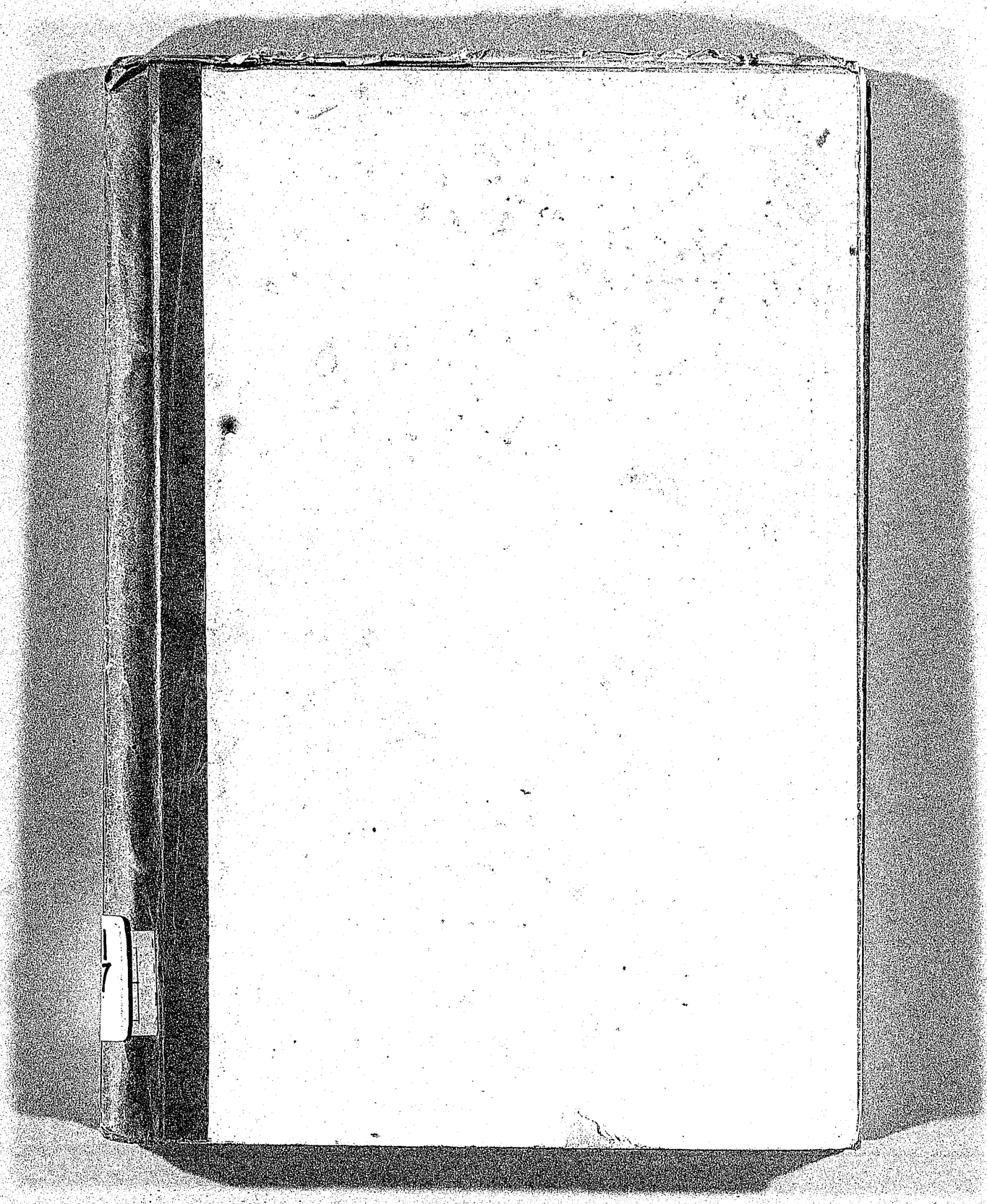
三輪芳苓ゟ　他ノ全集ヲ見ル事未見ノ書ヲ借ス事ヲ請フ、

拾遺集ノ末ニ六月廿六日ノ三字ヲ注ス　諸家ト表年等ヲ違フ一ツ

和歌山県立高等学校

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093



県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　04093